



あはれとさるちあ

作 ゴブリン串田



2010年東京―竹原家は老舗の焼肉屋を営んでおり
店の奥は縁側がある客間がある。
部屋の奥にはソファアがあり。そこに老夫婦が腰かけている
豊作とトヨだ。豊作がトヨに何やら耳打ちをすると

トヨ 『まこて！まこてしたんもんじゃ』

とトヨは笑う。豊作がもう一度耳打ちをすると

トヨ 『あらよー。どうしてそうなるの？』

とトヨが笑う。そういった会話が続いていたが
やがて『ただいまー』と少し疲れた様子の和世の声が聞こえた

和世 『はあ…（二人をみつけ）ただいまー』

二人は会話に夢中

和世 『じーちゃん！ばーちゃん！たーだーいーま！』

二人は会話に夢中

和世 『（少し笑顔になり）まあいいか…』

和世が二階に上がると静香が和世に話しかけた

静香 『お！おきゃーりー。早いじゃん？』

和世 『ああ…今日はただの休日出勤だからね』

静香 『へえくそうなんだ。おつかれ。ねねね？みた？』

和世 『何？疲れてるんだけど？』

静香 『見た？じーちゃんとばーちゃん！』

和世 『ああ…仲いいよねえ』

静香 『普通さずっと夫婦を続けて来たら話しなくなるじゃん？』

和世 『まあそうかも知れないね』

静香 『なんか秘訣とかあんのかな？』

和世 『どうなんだろうねえ…』
静香 『ちよつと聞いてみない？』
和世 『二人の恋愛ってどうだったんだろうねえ』
静香 『恋愛してたのかな？二人が結婚する年齢って終戦前か戦後だよ？』
和世 『まあねえ…』
和世 『なんであんな仲いいんだろうね』
静香 『私が推理するにね…相当な劇的恋愛をしてるんだと思うんだよね』
和世 『ええ？そうかな？』
静香 『うん。絶対にそうだよ！もうすぐご飯だから聞いてみよっか？』
和世 『教えてくれるかな？』

二人がそんな会話をしている間に夕食の準備が出来たみたいだ
リヨ子が入ってきて

リヨ子 『あんた達〜ご飯よ〜』
和世と静香 『はーい』

二人が降りて来ると食卓が出来ている

リヨ子 『あら？今日は早いよね？』
和世 『うん。今日は休日出勤だからね…一件済ませてきただけ』
リヨ子 『あらあく休みの日なのに？ブラックだね！』
和世 『ははは』
リヨ子 『じゃあ食べたら食器とかも洗っておいてね！』
静香 『お客さんいるの？』
リヨ子 『いや、いないけどお母さんが働いてないと思ったら
お父さんすぐに機嫌が悪くなるでしょ？』
静香 『まあねえ〜二人で飲食を営むのって地獄よね』
和世 『確かに…』
リヨ子 『昔は優しかったんだけどねえ…あんな男になるとはね！』
和世 『選んだのはお母さんだからね！』
リヨ子 『ザシヨック。自分の責任を取らないとね…ああく金持ちと結婚したかったあく』
和世と静香 『わかる〜』

三人が笑っていると

トヨ 『和世ちゃん。お帰りい〜』

和世 『ただいまあ〜』

トヨ 『おやつとさあねえ〜』

豊作 『仕事は終わったの?』

和世 『うん! 終わったよ!』

豊作 『おやつとさあ。おやつとさあねえ。どら? ウチんげえの和世ちゃんな

太(ふて) かなつどかい? どら? どら?』

豊作が和世を抱きかかえようとする

和世 『ちよつとじーちゃん! 私重いよ?』

リヨ子 『とーちゃん! 和世はもう25やつど? 腰がわるなつど!』

和世を持ち上げようとする

豊作 『あらあ〜! 和世ちゃんな太(ふと) かなつたねえ〜こげん太くなつどかい?』

和世 『もうだから無理だつて』

静香 『(笑いなながら) え? 太いって言つてない?』

和世 『ちよつと! 女性に対して太いって言つちゃダメだよ!』

リヨ子 『太くなつたつてのは大きくなつたねつて事だからね』

豊作頷いて自分の場所に戻る

豊作 『和世ちゃんもしーちゃんも。二人ともモゼね』

リヨ子 『よー。二人とも、おいの子供やっどん。モゼろー』

豊作 『うん。モゼ。モゼ。』

リヨ子 『とーちゃんリヨ子は?』

豊作 『∴。』

トヨ 『あらよお〜。リヨ子 とーちゃんな聞こえんつ』

リヨ子 『とーちゃん! リヨ子もモゼろが?』

豊作 『モゼモゼ。こげん沢山を料理を作るリヨ子はねモゼろ』

トヨ 『あんら。料理じゃなくて顔をほめんと』

静香 『もぜ?』

リヨ子 『可愛いつて事よ。お母さんの事可愛いつて言つてくれないの』

不機嫌そうに和憲が入ってくる

和憲 『おい。飯置いたらさっさと来いよ。客がいんだぞ?』

リヨ子 『はあ?知ってるし。』

和憲 『じゃあ、早く来いよ!』

リヨ子 『∴』

和憲 『お義父さん!お義母さん?今日の肉は柔らかいからね。飲みもんごつやっど』

豊作 『うん。うめね』

和憲 『じゃあ。ゆっくりりと。(リヨ子に)早くしろよ』

和憲 が不機嫌にハケ

リヨ子 『クソ男が!じゃあ。片付け頼んだわよ!』

和世と静香 『はーい』

リヨ子がブツブツ言いながら ハケて行く

和世 『じゃあ食べよっか!』

静香 『いただきます!』

豊作とトヨは手を合わせて小さい声で『いただきます』と言う

和世 『ばーちゃん。足大丈夫?』

トヨ 『ちよつと痛いかなあ∴でも東京に来たら元気になったよ』

和世 『早く治ればいいね!』

トヨ 『ありがとうございます』

トヨ が頭を下げる

豊作 『な?な?』

トヨ 『和世ちゃんがね!足をね大丈夫つ聞いたからね!ありがとうございますって言ったの』

豊作 『うん。ありがとうございます』

和世 『いやいや。頭を下げなくてもいいよ』

豊作 『こげなご馳走をね。毎日食べたらずくに治るよ』

トヨ 『うん。美味しいもん食べるとすぐに治るよ』

静香 『へえ!すごいねえ!すごいと思わない?』

和世 『いや。冗談でしょ』

和世 『やっぱり…』

静香 『そうみたいね』

豊作 『な？な？』

トヨ 『どうしてじーちゃんとかばーちゃんは結婚したの？つ！』

豊作 『おじいちゃんはね。地獄に落ちるんだよ』

和世 『は？』

静香 『どういう事？』

豊作 『戦争でねえ。ずんばい。人をね。殺したんだよ。』

和世と静香が食事を止めてしまう。音楽と共に文字が浮かび上がる

文字 『この物語は、とある老夫婦の話を元に創られた物語です。

戦争に関する史実は様々ありますが、

二人の話もまた真実だと信じ作られた作品です。』

『おやっさあ』

文字が終わると兵隊姿の力蔵と勲たちが満州の関東軍駐屯所で話をしている

勲 『いやあ…満州は広いねえ』

力蔵 『ああ。僕もびっくりしました。こげな土地があったいねえって』

勲 『こげな…ははは』

力蔵 『あ…すみません。訛りが取れなくて…わからなかったですか？』

勲 『いや。そんな事ないよ』

中園が入って来ると、力蔵と勲たちは慌てて立ち上がり

敬礼する。それを中園がし返す

中園 『有馬。もう慣れたか？』

力蔵 『ですね！もうここにきて一週間経ちました。広か土地で皆、いい人ばかり。満

中園 人も日本語を話せる人がいるんで安心しました』

力蔵 『そうだ。満人に俺たちが日本語を教えたんだからな』

中園 『すごいですね…』

力蔵 『ここは最前線じゃないが、お国のために働くのは変わらない。

中園 存分にはたらくんだぞ』

力蔵 『はい！』

中園 『で？山元は？』

力蔵 『あ。ほうさっどん…』

中園 『まさか…あいつ』

勲 『はい…また満人と仲良くしてます』
中園 『まったく…』
力蔵 『すみません…』
中園 『有馬。貴様は確か同郷だったよな』
力蔵 『です。同じ部落です』
中園 『じゃあ。貴様がちゃんとやっておけよ』
力蔵 『わかりました』

そこに趙（ちょう）と一緒に仲良さげに豊作が入って来る
二人は中園を見つけると豊作は慌てて敬礼。趙は深々と頭を下げる

豊作 『あ。中園さん！（敬礼）』
中園 『あ、じゃないだろ。お前何をしてたんだ？』
豊作 『いや…腹がへっせえ。趙さんにご馳走になっていました』
中園 『貴様、日本人として恥ずかしくないのか？』
豊作 『満人の方々は皆いい人達ですから！』
中園 『満人がいいひと？当たり前だろ。満人は日本人に施しをして当たり前なんだからな。だからと言って仲良しでいる必要なんかない！』
豊作 『でも…感謝はしないと…』
中園 『貴様…まさか戦争を遊びだと思っとらんだろうな？』
豊作 『いや…そんな…』
中園 『…殴れ』
豊作 『え？』
中園 『その満人を殴るんだよ。簡単だろ？なんだ？殴れないのか？』
豊作 『…』
中園 『やれ！』
豊作が躊躇していると力蔵が趙を殴る。豊作はあっけに取られていると

力蔵 『ほら！ほうさっどん！殴れ！』
豊作 『力蔵さん…』

豊作。仕方なく殴る

中園 『そうだ。それでいいんだよ。ちゃんと満人には日本人の方が偉いんだって教えておかないとな。（ほかの軍人に）おい。お前ら来い』

兵たち

『はい！』

中園が趙を蹴りハケ それについて行く兵たち勲だけが残り

勲 『おい。山元。あまり中園さんに逆らうなよ。』

豊作 『あ：はい』

勲もハケ

力蔵 『ほうさつどん。ないばしちよつど？』

豊作 『そげなこつ言われても：趙さん大丈夫？』

趙 『大丈夫です！大丈夫です！わかってますから』

力蔵 『さっきはすみませんでした』

趙 『いえいえ：』

豊作 『趙さんは何も悪くないのにねえ』

力蔵 『趙さんも。どうしてこげなとこまで来たんですか？』

豊作 『趙さんにずんばいご馳走になったからねえ。お礼をせんとバチが当たると思っ
せえね』

力蔵 『ここは関東軍の駐屯所だよ。こげんこつになる事はわかってるよね？』

豊作 『だよ。まさか中園んつあんわろがおるとはねえ』

豊作が嫌味っぽく言うと力蔵は少し笑い

力蔵 『ほうさつどん。ここは鹿兒島の部落じゃない。駐屯所やつど？鹿兒島と同じ気

持ちでいたら今度はあんたがバッチバチされつどね』

豊作 『あ、そうだった。ここは鹿兒島じゃなくて満州じゃ』

力蔵 『ほうさつどん：（また笑う）』

豊作 『じゃつど。趙さんがよか人やつで、鹿兒島かと思った』

力蔵 『ほうさつどん。ここでそんな冗談言わんの』

豊作 『どうりで桜島ん灰（へ）が降らんあつて思ったがよ』

趙 『サクラジマンへ？』

豊作 『じゃつど。趙さん、鹿兒島にはね。おっきな火山があつてね。それをね桜島つ
て言うてね。その火山が爆発したら（へ）が雨のごつ降ってくるんです』

趙 『へ？ああ灰の事ですね？私はおならの事かと思いましたよ』

豊作 『そりゃへじゃ。おいが言ったのは（へ）！』

力蔵 『あら？変わらんね？』

三人が爆笑をしていると力蔵が慌てて

力蔵 『満人とこげん大笑いをしてるところを見られたら危ない』

豊作 『じゃつどねえ。趙さんお礼はまた今度でもよかですか？』

趙 『いやいや：山元さんはいい人だし、面白い人ですから。いつも楽しい食事が出来て嬉しいんですよ』

力蔵 『そうですか』

趙 『私たち満州人を満人だと言って差別しますが、山元さんは違います。』

満州人も食べてませんが：山元さんが目薬をくれたんでそのお礼に：』

力蔵 『目薬。』

豊作 『まままま。趙さん！そりゃーまた今度。今日はごちそうさまでした』

力蔵 『すみません：さっきは痛かったですよ？』

趙 『いえいえ。関東軍の駐屯所にやってきた私が悪いんです。それじゃあ』

趙が深々と頭を下げてハケ

豊作もそれに合わせて深々と頭を下げる。力蔵、豊作のその姿をみて

力蔵 『じゃつどん。満州にはずんばい日本人がおつたい。どうしてあげん満人にご飯ば恵んでもらったと？』

豊作 『日本人も食べれてない。力蔵さんは腹へつどらんのか？』

力蔵 『そりゃあ：多少は』

豊作 『日本は：どうなるんやろね：』

力蔵 『ん？』

豊作 『満州は開拓地やっせえ。豊に暮らせるってきいちゃつたいが』

力蔵 『うん。ひろか土地やっで』

豊作が『俺もゆくから』を歌い始めると力蔵も合わせて歌う

豊作 『はあ：腹が減った』

力蔵 『支給がおくれちよつたい』

豊作 『じゃつどん：腹がへつたいが。腹が減っては戦は出来ん』

力蔵 『俺たちは戦はしとつたかいね？』

豊作 『まこて！力蔵さん！戦しちよつたいが！』

力蔵 『開拓地の見回りだよ』

豊作、力蔵を思いきり睨み

豊作 『お前…まさか戦争を遊びだとおもっとらんだろうな？』

力蔵 『ぷ…中園さんじゃ』

豊作 『こら！力蔵！お前の拳は腰がはいっちよらん！』

力蔵 『すんません！腹がへっせえ！見回りにも力がはいらんです！』

豊作 『おいも…』

力蔵 『ほら！冗談言わんと。俺はほうさっどんを教育せえ言われたんだよ』

豊作 『は？教育？学校は出よったいがね』

サイレンが鳴る。慌てて二人はハケる

場面チェンジ。鹿児島市の垂水市。鹿屋の隣の地域で

鹿屋は航空基地が空爆を受けていた

垂水市の人達は隣の空爆の音を聞き恐れていた

空襲の音

避難所に駆け込む。垂水の人達

とみ子 『わあああ…』

サチコ 『とみちゃん。おばさんは？』

とみ子 『かけっこが苦手だからね。幸彦兄ちゃんが連れてくると思う』

サチコ 『もう…怖いねえ…』

るみが駆け込んでくる

るみ 『怖い…怖い…』

とみ子 『るみちゃん。こっち！』

るみ 『足が動かない…』

サチコ 『怪我をしたの？』

るみ 『怖くて動けない…』

とみ子 『こっちこんね』

とみ子とサチコがるみを奥まで連れ二人はるみの背中をさすっている
そこにハルとトヨが駆け込んでくる

ハル 『トヨちゃん！早く！』

トヨ 『鹿屋の方でしょ？』

ハル 『万が一があるでしょ？』
トヨ 『うん…』
とみ子 『あ！トヨちゃん！どこにいたの？』
トヨ 『浜』
サチコ 『浜？また鹿兒島半島を見たの？』
トヨ 『大隅は鹿屋だけ。鹿兒島半島は知覧も指宿もあつて。煙が消えないなーつ』
とみ子 『のんきな事いつせえ…もー』

幸彦の声が聞こえる

幸彦 『かあちゃん！はよせんと！』
ウメ 『そげな事言われてもねえ。足がついてこないの』

幸彦が入って来る、それに続いてウメがようやく入って来る

ウメ 『よっこいせ。あいたたたた』
ハル 『おばさん。大丈夫？』
ウメ 『疲れた。もう年やつでかけっこは疲れる。わっせ疲れた』
サチコ 『おやつとさあ』
ウメ 『はら？これだけ？』
ハル 『です。トヨちゃんと私は浜にいたんで。すぐに来れたんです。』
ウメ 『和子ちゃん？』
サチコ 『うちのかーちゃんは、多分チヨさんを迎える』
ウメ 『チヨさんは病弱でしょ？幸彦！和子ちゃんとチヨちゃんを迎えに行かんか！』
幸彦 『うんにゃ！おいが出たらけ死ぬ』
ウメ 『そんな簡単にはけ死なん』
ハル 『うちのかーちゃんがいるから。大丈夫ですよ』
ウメ 『大丈夫かねえ』
幸彦 『おいが出たらおいが危ないが』
ウメ 『あんたはよー。丈夫にかーちゃんが育てたんだよ。簡単にはけ死なん』
幸彦 『け死んだら、かーちゃんの面倒は誰がみっど？』
トヨ 『かーちゃんの面倒は私ととみ子が見るからね。安心してね』
幸彦 『お前！おいがけ死んでいいのか？』
とみ子 『大丈夫。幸彦にーちゃんは簡単にはけ死なん』
ハル 『じゃあ…私んげー見てくつが。サチコいつが』
サチコ 『うん』

幸彦 『ハルちゃん。大丈夫？』
ハル 『大丈夫。攻撃されてるのは鹿屋ですから』

ハルがにっこり笑って行こうとすると

幸彦 『わかった！おいがいくから：ハルちゃんとシズちゃんはここにおえよか』
ハル 『え。でも…』
ウメ 『えたいがえたいが。幸彦に任せとけばえたいが』
トヨ 『幸彦。大丈夫でしょ？』
ハル 『でも幸彦さんはあわてんぼうだからねえ』
幸彦 『ハルちゃん！大丈夫だよ！慌てずにいつが！』

幸彦が行こうとすると和子と千代が入って来る

和子 『千代さん。大丈夫？』
千代 『ありがとうございます。和子さんがいるから安心です』
ウメ 『和子ちゃん。大丈夫？』
和子 『うん。私は大丈夫。千代さんは病弱やつで心配じゃ』
ウメ 『ほうさっどんがいたらねえ』
千代 『豊作は戦争に行ってるんで頼れません。私がきばらんと』
ウメ 『ぐらしかねえ』
幸彦 『何（ない）がぐらしいの？』
ウメ 『千代さんはほうさっどんと二人で暮らしてるからねえ。千代さんは病弱だから一人じゃ大変でしょ？』
幸彦 『ほうさっどんはお国のためにきばつたいが。ないもぐらしかね』
ハル 『千代さんには私とサチコとかーちゃんがいます。』
サチコ 『じゃっど。隣に私たちがいるから千代さんは心配ないです』
ウメ 『はらーそうだった。有馬さんげーがあったねえ』
幸彦 『はあ…おいもお国のために行きたかったあ…』
ウメ 『あんたはよ。元気があつて。この部落にいてもらわんと困る。だからねえ、国の人達があんたを残す様にしちよつたいが』
千代 『女ばっかいやつで。幸彦さんが居たら助かる』
和子 『だよ。力蔵も戦争に行つてねえ幸彦ちゃんも取られたら困る』
ハル 『だよー』
幸彦 『そげんこつ言われても…』

空爆の音が遠くで聞こえる 悲鳴

ウメ 『まこて…』

和子 『全然。なれん…』

千代 『疲れた…』

るみ 『怖い…怖い…』

とみ子 『るみちゃん…大丈夫？』

ウメ 『ほら、るみちゃんこっちこんね』

るみ 『おばさん…』

るみがウメの所に行き 肩を寄せる

とみ子 『いつまで…こんな事するんだろね…』

トヨ 『だよ。戦争はいつまでするんだろねえ』

幸彦 『ねーちゃん。心配しなくていいよ。日本は今勝ってるんだよ』

ウメ 『本当に勝ってるのかねえ…』

幸彦 『なんでよ？』

千代 『最近上空襲がふえたもんねえ』

ハル 『だよ。日本が勝ってるのに空襲が激しいって…』

和子 『あの二人は大丈夫かねえ…』

一瞬全体が静まる

トヨ 『和子さん。大丈夫ですよ。力蔵さんは私と約束をしたんです。だからきつと大丈夫です！』

千代 『です。和子さん。あの二人は満州に行っただけです。満州は日本の開拓地やっで。

銃撃戦は無いつて言っていました』

和子 『だった。』

サチコ 『それに、力蔵兄ちゃんな簡単にけ死なん！』

ハル 『だよ！ね！トヨちゃん！』

トヨ 『うん。そんな簡単にけ死なん。』

ハル 『トヨちゃんと約束してるんだからね。約束破るつ力蔵にいちゃんはしないよ』

ウメ 『だよ。私たちは私たちが鹿兒島を守らんと！』

千代 『二人が同じ満州に行つてよかったあ』

和子 『だよ。二人は大丈夫。千代さんも元気にしないとね。きばらんと！』

千代 『です。私も簡単にはけしなん！』

ウメ 『幸彦は戦争に行かないから安心じゃ』
幸彦 『おいは戦争にいったいが！』
トヨ 『まこて？役にたつの？』
幸彦 『よー！おいは最前線にたっせえお国のために働く！』
トヨ 『その身長でね？』
幸彦 『身長の方は関係ない！』

全員が笑う

すると男の声で『空襲警報解除！』と言う声が聞こえる
壕の中にキヨシが入って来る

キヨシ 『この壕には負傷者はいますか？』
清彦 『全員無事であります！』
キヨシ 『おお。幸彦ちゃん。ありがとね。空襲が解除されました。』
清彦 『わかりました！』
キヨシ 『じゃ、おいは他の壕も覗いてきますんで』
ウメ 『キヨシさんありがとねー』
千代 『まこて…』
とみ子 『立ったい。座ったい…疲れる』
和子 『千代さん。もう少し休んでいく？』
千代 『うんにゃ。大丈夫。家の方が落ち着く。ここは気持ちがい』
ハル 『だよ。ここに居たら気が滅入る』
幸彦 『じゃあおいは男んしゃーと一緒に家の様子を見てきます！』

幸彦 が元気よくハケ
それに続いて一同がハケて行く トヨとハルだけが残り

トヨ 『るみちゃん？大丈夫？』
るみ 『鹿児島は大丈夫かね…私は…こえ』
トヨ 『…大丈夫だよ。鹿児島はこげんこつで終わらん』
るみ 『うん…』
トヨ 『だよ。るみちゃん。力蔵さんたちが日本を守ってくれるから大丈夫だよ！』
るみ 『だよ。私もきばらんとね』
トヨ 『そうだよ』

二人がハケて行く

場面チェンジ。現代に戻る。夜。外を見てる和世
そこに静香が入って来る

静香 『うう…』

和世 『大丈夫？』

静香 『うん。大丈夫。なんか戦争の話エグみ』

和世 『確かに』

静香 『てかさ…ばーちゃんにはイケメンの彼氏がいたんだねえ』

和世 『うん。そうみたいだね。イケメン…よかにせのね』

静香 『うん。そうそう。よかにせ』

二人は滑稽な鹿兒島弁に笑う

和世 『でもすごいよね』

静香 『何が？』

和世 『学校で習った戦争とかはなんかものすごい前の物だなあ…なんて思っていた

けど、じーちゃんとばーちゃんの話聞いていたらさ。めちゃくちゃ最近じ

ゃん！って思わない？』

静香 『うん。そうだねえ。昔と比べて今は幸せなのかなあ…』

和世 『どうだろうねえ』

静香 『え？ねねね？そんなに会社ってキツイの？』

和世 『んー。そうだなあ…パワハラとかセクハラとか結構当たり前だな』

静香 『えええ！こんなご時世なのに？ちよ…大卒もヤバいかな？』

和世 『まあ…こんなご時世でもって感じかな。大卒…もっとヤバイかもね』

静香 『はあ…一生ネコと暮らしたい』

そんな話をしてると豊作が横切る

和世 『あれ？じーちゃん？』

静香 『ちよっと…もしかしてボケたんじゃない？』

和世 『いやいや…そんな訳…』

静香 『じーちゃん！豊作じーちゃん！』

豊作通りすぎる

静香 『やば…絶対にボケてるよ。アレ』

和世 『アレって言わないでよ』

リヨ子が入って来る

リヨ子 『もー。とーちゃんはなんでも食べる』

和世 『どうしたの？』

リヨ子 『さっき晩御飯たべたでしょ？』

静香 『うん』

リヨ子 『それでさっきお腹が空いたからってうどん食べに行ったんだって』

和世 『えええええ！さっきけっこう食べたでしょ？ご飯おかわりしてたよね？』

リヨ子 『そうなのよねえ…』

豊作、後ろ向きに戻って来る

リヨ子 『え？ちよ。何あれ？』

静香 『あれ？本当にボケちゃったのかな？』

和世 『：ちよっと不気味よね』

リヨ子 『とーちゃん！後ろ向きで歩いたら危ないでしょ！』

豊作振り返り

豊作 『じーちゃんの頭の後ろにはね目が付いててね。後ろ向きでも歩けるんだよ』

静香 『え？は？』

和世 『え？何の冗談？』

豊作 また振り返り歩きだす

リヨ子 『ちよっと！とーちゃん！危ない！』

豊作 コケる

リヨ子 『ちよ！とーちゃん！』

豊作 『若（わけ）頃は歩けたんだけどね』

リヨ子 『とーちゃんはもう年寄りやっでん。歩けないのよ』

豊作 『うんにゃ。目が付いてるから歩ける』

リヨ子 『まこて！』

豊作 縁側に座る

豊作 『あいたこいよ』
和世 『じーちゃん大丈夫？』
豊作 『うん。うん。大丈夫』
静香 『大丈夫とかじゃねーよ』
和世 『あんな豪快にコケる？』
豊作 『大丈夫。後ろにも目がついてるからね』
リヨ子 『まだ言う？』

三人が爆笑する 豊作は少し満足気 するとリヨ子が豊作の耳元で

リヨ子 『もう危ないからしないでね？』
豊作 『(満足そうに) うん。うん。』
静香 『なんか嬉しそうなんだけど』
リヨ子 『もう…あんだ達、明日は学校と仕事じゃないの？』
静香 『うん。でも余裕。もう就職決まったし行っても行かなくてもいいっしょ』
和世 『いいですねえ。はーあ…そろそろ寝るかあ』
豊作 『ここはいいねえ』
リヨ子 『ここ？』
豊作 『リヨ子、ここは良い縁側じゃ』
リヨ子 『ああウチにもあったよね？』
和世 『ああ。田舎にあったねえ』
静香 『覚えてる！小学校の夏休みに行ったなあ』
和世 『あ、じーちゃん。満州もキレイだったの？』
豊作 『だよ。よかあんべだった』
リヨ子 『よかあんべ。いい感じだったって事よ』
和世 『へえ』
豊作 『満州人の人の料理も美味(うめ)かったあ…』
リヨ子 『さっきうどんも食べたのにまた食べる話？』

趙、娘、祖母が入って来る

豊作は帽子をかぶって立ち上がり

豊作 『いやあく美味(うめ)かったあ！こげん美味か料理は初めてじゃ！』

趙 『いや…本当に量が少なくて申し訳ないです』

豊作 『うんにゃ！いいんですよ！気持ちが悪くさん入ってました！』

趙 『すみません…日本人に協力してる事がバレたら仲間から目をつけられますんで…あれくらいしか…』

趙祖母 『(中国語) 本当ありがとうございます。おかげで目もよくなりそうです』

趙 『目が良くなりそうと云ってます』

豊作 『おお！それは良かった！』

趙祖母 『(中国語) こんなに目に染みるのはいい薬の証拠ですよ！』

趙 『目に染みるって事は効果があるって云ってますね』

豊作 『だよ。良薬は口に苦しって日本にもある言葉だよ』

趙娘 『(つたない日本語) マタキテネ』

豊作 『おお！』

趙 『私が教えたんです！』

趙娘 『(つたない日本語) マテルヨ』

豊作 『もちろんですよ！是非お願いします！』

趙親子が何度も礼をしながらハケて行く。

入れ替わりに力蔵が少し怪訝な顔をして入って来る

力蔵 『ほうさっどん』

豊作 『ああ。力蔵さん！』

力蔵 『また趙さんげーに行ってたの？』

豊作 『だよ。またご馳走になった』

力蔵 『目薬？』

豊作 『まあまあ。腹いっぺだし戻ろう』

力蔵 『どこで手に入れたの？』

豊作 『家から…持ってきた』

力蔵 『家から？鹿兒島から？』

豊作 『よー。かごんまからよ。何(ない)がおかしいの？』

力蔵 『ほうさっどんは目がいいでしょ。どうして目薬なんかもってきたの？』

豊作 『…水たまりん水』

力蔵 『え？』

豊作 『水たまりの水すくいよっせえ。ばーさんにあげたんよ』

縁側に座って話を聞いていた様子の和世がびっくりしながら

和世 「え？じゃあ泥水をあげたの？」
静香 「いたたた：そりゃ目に染みるわー」
リヨ子 「ちよっと冗談にならんかもね：」

随分とあきれた様子で力蔵が力なく話す

力蔵 「なしてそげなこつ：ぐらしか：」
豊作 「わかっちゃつたいが。それでも腹がへつたいが。
力蔵さん。ないで関東軍には物資が届かんの？」
力蔵 「きつと遅れてきよつせえ：」
豊作 「うんにゃ。もしかして：もしかして日本はもうよくないのかもしれない」
力蔵 「ほうさつどん：」
豊作 「力蔵さん。こないだの伍長会議でわかったでしょ？：：バカなおいでもわかるよ
軍はどんどん南下していく、なのに満人にはドンドン敵しくしていく！
それも威厳のためだよ？情けない：日本人はこれでいいの？」

力蔵は何も言えなくなるが、少し意を決した様子で

力蔵 「うんにゃ：いいことなんてない。ほうさつどんの言う通りだよ」
豊作 「だよ。じゃあ何とかせんと！そう思わんの？」
力蔵 「思う。でも：大きい声でそれを言うとほうさつどんが不利になる」
豊作 「力蔵さん：すまんかった」

力蔵のおなかの音になる

力蔵 「ふふふふ：腹がなった」
豊作 「よー。みーんな腹が減ってるんよ」
力蔵 「ちきあげが食べたい」
豊作 「おいも：満州の料理よりも鹿兒島のちきあげが食べたい」

笑いながら力蔵がハケ 豊作は縁側に腰かける
縁側の三人が話す

静香 「ちきあげ？」
和世 「さつま揚げの事でしょ？」
静香 「へー」

リヨ子 『満州で兵隊はお腹が空いていたのね：ぐらしいね』

静香 『ぐらしいは？』

リヨ子 『可哀想って事ね』

静香 『そっかあ：じーちゃん。おながずっと空いてたから今取り返してるのかもね』

リヨ子 『そうかもねえ：じゃあ今日はこれくらいにして寝るわよ』

静香 『はい』

静香があくびをしながらハケて行く

リヨ子 『和世も。遅刻なんかしたら会社でまた言われるんでしょう？』

和世 『うん：じーちゃん。続きまた聞かせてね』

豊作 『うん。うん。和世ちゃん。おやすみ』

和世 『おやすみなさい』

和世がハケ

リヨ子 『とーちゃんももう寝っど？』

豊作 『うん。もう少しこけ』

リヨ子 『本当にもう：』

リヨ子 あきれ顔でハケ 豊作が立ち上がりまた満州を見渡している

力蔵たちと日本刀をもった中園が入って来る

中園 『山元。そこで何をぼーっとしてるんだ？』

豊作 『いや：はい。えと：ちょっと満州はひろか土地だなあって思っていました』

中園 『寝ぼけた事ばかり言いやがって』

豊作 『すみません』

力蔵 『(耳打ちをして)中園さんは今日は機嫌が悪いからあまり言わない方がいいよ』

豊作 『わかりました』

中園 『山元。まだ満人と仲良くしてるのか？』

豊作 『いえ。最近は全く』

中園 『そうか：ちょっと今日はな訓練をしようと思ってな』

豊作 『はあ：訓練：』

中園 『お前もお国のために活躍したいだろ？』

豊作 『もちろんです！』

中園 『じゃあ。お前にこれをやろう』

豊作 『ありがとうございます』

中園 『じゃあ早速試し切りをしてみようか』

豊作 『試し切り?』

勲が縛った趙の娘と祖母を連れて入って来る

豊作 『え? ちょっと...』

趙の娘は豊作の日本刀を見て叫ぶ

趙娘 『(中国語) それ刀でしょ? どうするつもり殺すつもり?』

豊作 『いや... ちょっとこれは...』

趙祖母 『(中国語) どうしたの?』

趙娘 『(中国語) 私たち殺されるかも知れない! 今刀を持つてるの!』

豊作 『中園さん! すみません! できません!』

中園 『は? 出来ないだ? お前はそれでも軍人か!』

豊作 『いや。そうではなくて... これはあまりにもやり過ぎじゃないでしょうか?』

中園 『問答無用!』

豊作 刀を抜きゆっくり構える

趙娘 『(中国語) やめて! お願い! 許して! 殺さないで!』

趙の祖母は何やら祈っている

豊作が刀を振り上げる

趙娘 『(つたない日本語で) ゴメンナサイ... ユルシテ...』

豊作 刀を置いて土下座する

豊作 『どうかこの通りです! これは出来ないです!』

中園 『まだ言うか! (豊作を蹴り上げる)』

力蔵 『ほうさっどん...』

中園 『やれ! (殴る)』

豊作 『日本語です! あの子は日本語を話してるんです!』

中園が豊作を蹴り上げる

中園 『わかった。じゃあババアを斬れ』

豊作 『え：そんな：』

力蔵 『中園さん！（土下座）私からもお願いします！やめさせてください』

豊作 『力蔵さん：』

中園 『そうか。有馬：じゃあ。貴様がやれ』

力蔵 『：はい。わかりました』

豊作 『力蔵さん：』

力蔵が立ち上がり 趙の祖母を連れて行く

趙娘

『ユルシテ！ユルシテ！』

中園 『うるさい！山元！その女を連れていけ！』

豊作 『はい。』

中園と勲が下手ハケ

趙娘

『（中国語）鬼！悪魔！人殺し！』

豊作は趙の娘を連れて上手ハケ

海の音が聞こえる トヨが縁側から入って来る

トヨ。海をしばらく眺めている

そこに千代が入って来る

千代 『あー。気持ちいいねえ』

トヨ 『あ、千代さん。こんにちは』

千代 『こんにちは』

トヨ 『大丈夫ですか？こんな所まできて』

千代 『大丈夫。今日は調子がいいよ。浜だったら鹿児島が良く見えるねえ』

トヨ 『です』

千代 『垂水からはこうして眺めるだけしか出来ないよねえ』

少しの間

千代 『るみちゃん：ぐらしかね』

トヨ 『戦争がるみちゃんの家族を奪いました…』
千代 『戦争が?』

トヨ 『です。戦争です。外国と日本の喧嘩でしょ?その喧嘩のとばっちりであるみちゃんの家族はいなくなっただんです…
早く煙がなくなればいいのについて思ってます。』

千代は黙ってでニコニコとしている。トヨは戦争を反対するような言葉を発した自分に気が付き

トヨ 『あ!ごめんなさい!お国のために頑張ってる人達がわっぜえ いるのに』

トヨが頭を下げると

千代 『トヨちゃんは戦争が嫌い?』

トヨ 『えと…それは…』

千代 『私はね…大っ嫌い!』

トヨ 『え?』

千代 『こげん怖い思いをするし、豊作ちゃんを取って行くし…いいことなんてない』

トヨ 『です。私も大っ嫌いです!』

千代 『だよ。おなかもすくし、全然いい事なんかない』

トヨ 『力蔵さんも戦争にもっていかれたし。いいことない!』

千代 『だよ。戦争なんかなくなれ!終わってしまえ!』

千代が海に向かって叫ぶ 波の音でその声はかき消される

千代 『トヨちゃんも言ってみなさい。気持ちがスーッとするよ』

トヨ 『はい!(息を吸い込んで)戦争なんか早く終われ!』

千代 『日本が勝っても負けても知らん!早く終われ!』

トヨ 『だよ!早くおわれ!』

また波音が二人の言葉を消し去り、二人は顔を合わせ笑い合う

千代 『こげな所でこんな話をしたって事は内緒だよ?』

トヨ 『はい。絶対に誰にも話さない!』

千代 『約束だよ!』

トヨ 『はい!』

指切りをする 千代はトヨを見つめる

トヨ 『どうかしました?』
千代 『トヨちゃんはモゼねえ』
トヨ 『え?急にどうしたんですか?』
千代 『有馬さんげえの力蔵さんは幸せものだねえ』
トヨ 『えええ…』
千代 『こげんモゼか子をお嫁にもらえて幸せだあ』
トヨ 『いや…そげん事ないですよ』
千代 『おげん豊作ちゃんもこげな子をお嫁にもらわんかね?』
トヨ 『ああ…ほうさつどん。あんなは優しい人だから、きつといい人見つかりますよ』
千代 『かね?満州に行つて中国人のお嫁さんを連れてきたらどうしようかねえ』
トヨ 『えええ』
千代 『私は中国語はしゃべれん…』
トヨ 『え?お嫁に来てもらうんだつたら日本語を覚えてもらいましょう!』
千代 『あ!本当だねえ!まこてトヨちゃんは頭がいいねえ』
トヨ 『いやいや!そげん事ないですよ!』
和子 『あら?二人で内緒話?』

和子が海にゴミを捨てる

和子 『家族が三人もいるからゴミが出つて』
トヨ 『和子さんじゃ。こんにちは』
千代 『こんにちは』
和子 『あらー。千代さんもいた』
千代 『ちよつと調子が良かったんで散歩に來ました』
和子 『えがつたねえ。運動をしないとよくなるもんもならん』
千代 『です』
和子 『何を話してたの?』
千代 『トヨちゃんはモゼつ。力蔵さんがうらやましいつ』
和子 『あー。トヨちゃんが来てくれたらおばさんもううれしい』
トヨ 『もー。恥ずかしいです』
和子 『力蔵も立派に国の役に立って帰つてくるっせえね。よろしくね』
トヨ 『和子さん!気が早え!』
和子 『こげん良か子はね。先にツバつけとかんと』

千代 『だよ！大正解じゃ。トヨちゃんみたいなモゼ子はすぐにとられっど』
和子 『だよだよ。だから今んうちにきっちり話をつけとかんと』
トヨ 『和子さん。大丈夫ですよ。力蔵さん以外に私考えれん』
和子 『あらー。はっきりものを言う子じゃねえ』
千代 『和子さん。トヨちゃんに有馬家をのつとられるよ？』
和子 『負けてられん！』

そこに幸彦が入って来る。慌ててる様子

幸彦 『ねーちゃん！やっぱり浜にいた！千代さん、和子さんまで！』
千代 『こんにちは』
和子 『こんにちは』
幸彦 『あ、こんにちは。』
トヨ 『幸彦どうしたの？』
幸彦 『そいが…大変な事になった。』
トヨ 『だから、どうしたの？何かあったの？』
幸彦 『よー。大変も何も…広島でわっせ爆弾が落ちたでしょ？』
和子 『ああ…広島んしゃー。ぐらひかねえ…』
千代 『ねえ。ぐらひー』
トヨ 『そん爆弾がどうしたの？』

幸彦一瞬、目線を落とし

幸彦 『長崎にも落ちた』
トヨと千代 『まこて…』
和子 『あらよー…』
幸彦 『そん爆弾が鹿兒島に落ちたら…垂水も危ね』
千代 『はあ…』

千代がその場所に座り込んでしまう

和子 『千代さん！大丈夫？』

千代は呼吸を荒くしている

和子 『千代さん！千代さん！』

幸彦 『おいの背中乗せんみよ!』

千代 『あたしは重いから:』

トヨ 『大丈夫! 幸彦は千代さんなら三人は乗せれるよ』

幸彦 『千代さん心配せんでええ。おいの背中は牛のごつやっで』

トヨ 『だよ!』

千代 『じゃあ:よろしく:』

千代を背負って幸彦達がハケて行く

和世が帰り支度を済ませ会社から出ようとした時に課長の岡谷と斎藤たちに呼び止められる

岡谷 『おい。竹原』

一瞬ビクつとなり和世は振り返る

和世 『はい。』

岡谷 『もう帰んのか?』

和世 『ええ。ちよつと今週は祖父と祖母がかえって来てるんで早めに帰ろうかと思いまして:』

岡谷 『へえ::のんきなもんだねえ。仕事残して帰るなんてな』

越後 『やば::神経がわかんない』

阪本 『せめて仕事終わらせてから帰った方がいいんじゃない?』

和世 『いや::でも報告書なら書き終えて提出しましたから:』

岡谷 『報告書ってこれか?』

和世 『あ::はい』

岡谷 『(和世の頭をたたきながら) こーれーが報告書ですかー?』

越後 『岡谷さん! それパワハラですよ?』

阪本 『てか、体罰だし』

岡谷 『いや、強めに頭をなでてるんだよ! それに痛くしてないよな?』

和世 『あの::ダメでしたか?』

岡谷 『お前舐めてんの? こんなの報告じゃなくて感想文でしょ?』

和世 『いや::でもそれでいいって先輩が:』

斎藤 『え? 俺のせい? ちよ::なんなの? それ』

和世 『すみません』

岡谷 『じゃあこれ、書き直してから帰れよ。それじゃ』

岡谷と斉藤が帰ろうとする

和世 『あの…これ書くのに二時間かかってしまったんでその…』

岡谷 『じゃあ二時間残業すればいいじゃん』

和世 『えと…昨日も残業して遅かったし…終電でかえって…』

岡谷 『だから？』

和世 『今…9時ですから…明日じゃ…』

斎藤 『何のんきな事言ってるの？明日朝一で俺が確認してやるからさ。とりあえず今日中に片付けておけよ』

和世 『はい…わかりました』

岡谷 『おつかれ』

斎藤 『じゃあお疲れ様』

和世 『お疲れ様でした…』

越後 『ごめん…頑張ってたね！』

阪本 『岡谷さんの前だし…あんな態度しか取れないのよね？じゃあね！t』

岡谷と斉藤たちがハケ 和世は溜息をつきながら家に帰る
場面チェンジ。縁側には豊作が座っている M 鈴虫
疲れ切った表情の和世が帰って来る

和世 『ただいまー』

豊作 『あ、和世ちゃん。おやっとなさあ』

和世 『ただいま…』

和世が部屋に行こうとすると

豊作 『和世ちゃん。こけ！こけ座らんね』

和世 『ごめん。じーちゃん。疲れてるし明日早いなだよね』

豊作 聞こえていないのか手招きをして廊下を優しくたたいてここに座れと
合図する 洪々座る和世

和世 『どうしたの？』

豊作 『こんな時間まで働いてたの？』

和世 『うん。そうなんだよね…つかれたあ』

豊作 『おやっとなさあね』

和世 「ジーちゃんは？ここで何をしたの？」
豊作 「和世ちゃんの帰りを待ってた」
和世 「え？うそ？」
豊作 「(頷いている)だよ」
和世 「ありがとう」
豊作 「な？な？」
和世 「あーりーがーとーう！」

豊作が満足気に頷いていると、トヨがゴソゴソと起きてくる

トヨ 「和世ちゃん？」
和世 「あ、起こしちゃった？ごめんね」
トヨ 「大丈夫だよ」

トヨも(よっこらせ)と言いながら縁側に座る

トヨ 「今帰ったの？」
和世 「あ、うん。」
トヨ 「こげな時間まで働いたの？おやっとさあねえ」
和世 「うん。でも私が悪いから」
豊作 「(頷きながら)ジーちゃんとばーちゃんは明日鹿児島に帰る」
和世 「え？そうなの？」
トヨ 「うん。ちょっと。都会はジーちゃんとばーちゃんは疲れる」
豊作 「そうだよねえ。騒がしいもんね」
豊作 「な？な？」
トヨ 「都会なさわがしろーつ。和世ちゃんが」
豊作 「うん。鹿児島はね。静かでね遠くの方まで山が見えるよ」
和世 「そうだろうね」
トヨ 「長い事お世話になりました」
豊作 「お世話になりました」

二人が深々と頭を下げる

和世 「いえいえこちらこそ」

和世も頭を下げる

トヨ 「じゃあ…じーちゃん。そろそろ寝ようかね？和世ちゃんも明日はやいんでしょ」
和世 「うん。わざわざそれを言う為に起きてきたの？」
豊作 「和世ちゃんのおとうさん、リヨ子、しーちゃんには挨拶をしたけどね。
和世ちゃんにはまだ挨拶をしてないからね」
和世 「えええ。わざわざありがとう…ごめんね」
豊作 「それじゃあ。寝よかいね。」

豊作が立ち上がろうとすると

和世 「ねえ…じーちゃんて、本当は人を殺してないよね？」
トヨ 「…責任感が強い人だからねえ。じーちゃんは…。」
和世 「どういう事？」
豊作 「殺したんだよ…」

ドンと言う大きな爆発音がする火事の間少しの間があり傷ついた勲が入って来る

勲 「うう…」

力蔵が慌てて入って来る

力蔵 「勲さん！勲さん！大丈夫ですか？」
勲 「おお…有馬…逃げろ…満人が…」
力蔵 「満人が…どうしたんですか？」
勲 「襲ってきた…」
力蔵 「え？どういう事ですか？」

趙が入ってきて勲を蹴る
勲が吹き飛ぶ

力蔵 「趙さん！」
趙 「…日本はもう終わりです」
力蔵 「何があったんですか？」
趙 「私たち…日本人を許しません」
力蔵 「…」

勲 「有馬：逃げる…」

趙、無言で持っていた棒で勲を数回叩く

勲絶命する 力蔵 言葉にならない

豊作が慌てて立ち上がる

豊作 「：趙さん。何（ない）しちよつとですか？」

趙 「暴動です。私たちあなた達を殺しにやってきました…」

力蔵 「満人の人たちは武器はもってないんですよね？どうやって？」

趙 「鍬や鎌。農具が主です。それでも人は殺せます」

力蔵 「ほうさっどん：勲さんがけ死んだ」

豊作 息をのむ

豊作 「なしてこげなこつ…」

趙 「逃げてください…」

豊作 「え？」

趙 「あなたは私の娘を守ってくれた…。あなたは私が仲間に話して助けます」

豊作 「力蔵さんは？」

趙 「お前は私の母を殺した！」

手りゅう弾が爆発する音が聞こえる

力蔵 「はぁはぁ…今の音は…」

豊作 「手りゅう弾じゃ…」

中園が傷ついた姿で入って来る

中園 「山元…」

力蔵 「中園さん！」

豊作 「大丈夫ですか？」

中園 「ソ：ソ連の兵がいた」

豊作 「ソ連…」

中園 「：貴様は…知っていたんだろ？」

豊作 「何（ない）を言ってるんです？」

中園 「こんな奴とつるみやがって…」

豊作 「そげんこつなかです！」
中園 「俺は…お前を許さんからな…」
趙 「山元さん！こいつらを置いて逃げてください！」
豊作 「でも…」
趙 「逃げてください」
中園 「おいて行かないでくれ…」
趙 「(中国語) まだ生きてたのかあ！死ね！死ね！」

趙が中園の頭に何度を殴打する

豊作 「趙さん！」
趙 「こいつは死んでいい人間なんです。私の仲間をたくさん殺しました
そしてそいつも」
力蔵 「え？」
豊作 「あの…力蔵さんは許してもらえないですか？」
趙 「ダメです」

豊作 土下座をする

豊作 「あん時…おいが出来んから助けてくれたんです。力蔵さんは優しい人なんです」
趙 「…」
豊作 「こん通りです！」

力蔵も思わず土下座をする

趙 「逃げてください」
豊作 「力蔵さんだけは…」
趙 「早くしないと、仲間がやってきます！その人と一緒に逃げてください」
豊作 「趙さん…ありがとう」

力蔵と豊作は趙に深々と頭を下げる。

趙 「元気でいてください…」

頭をあげ二人は頷く 力蔵はハケて行く。

満州人たちが駆けつけると

趙 『こっちにはもういない！（中国語）日本人はここにはいない！』

照明チェンジと共に勲と中園は中国人たちに連れて行かれる
豊作、再び老人になり

和世 『その人に助けってもらったんだ。いい人だったんだね』

豊作 首を振る

豊作 『その助けてくれた人はね…満人を裏切ったと言われっせえ殺された』

和世 『そうだったんだ…』

豊作 『家族みーんな。殺された』

和世 『家族みんな？』

豊作 『だよ。だからね。じーちゃんが殺したようなもんなんだよ』

和世 『いや…じーちゃんは殺してないよ。悪いのはその兵隊の人でしょ？』

豊作 『…その人にも家族がいたんだよ。け死んだら会えん』

和世 『…』

トヨ 『戦争は嫌だねえ…』

豊作 『じゃ寝よかいね』

トヨ 『和世ちゃん、明日は早いでしょ？』

和世 『え？うん…』

和世が何か考え事をして動けずにいると

豊作 『逃げていいんだよ』

和世 『え？』

豊作 『じーちゃんもね。だめだーって思っせえね一生懸命逃げた』

和世 『…まだ三年も働いてないし…。それに上司にそんな事言えないよ』

豊作 『和世ちゃんはいいちゃんの孫やっで。わっせ逃げ足は早かろー』

和世 『じーちゃん』

豊作 『どら。じーちゃんにギュっとさせんめ』

豊作 両手を広げて和世を抱きしめる

豊作 『(頭をなでながら) 出来るよー。出来るよー。』
トヨ 『どら、ばっばんにもギユっとさせんめ』

トヨが和世に近づき抱きしめる

トヨ 『モゼ〜。和世ちゃんはわっぜ色が白くてモゼ〜』
和世 『…ありがとう』

ハグをする。豊作とトヨは何か最後の別れを感じているかのよう
少しの間 豊作ハグをやめ

豊作 『爺やん(じやん)なもう寝くつで』
和世 『じーちゃん。おやすみなさい』
豊作 『おやすみ』

豊作、和世に一礼をしてハケ

トヨ 『おやすみなさい』

トヨも一礼をしてハケ様とする

和世 『ばーちゃん』
トヨ 『どうしたの?』
和世 『じーちゃんの事大嫌いだったんでしょ?』
トヨ 『うん。そうだねえ。』
和世 『その人と結婚できて幸せ?』
トヨ 『うん。幸せだよ』
和世 『どうしてそう思えるの?』

相変わらずニコニコとしながら

トヨ 『じーちゃんのおかげでねえ、リヨ子に会えた。和世ちゃんに会えた、
しーちゃんに会えた。ばーちゃんは幸せ〜』
和世 『ばーちゃん…』
トヨ 『じーちゃんには感謝だ〜』

和世 『そうだね。じーちゃんに感謝だね』

和世 『ばーちゃん。私もつと二人の話を聞きたい！』

トヨ はにっこりと笑い

トヨ 『じゃあ、教えてあげるから鹿児島に遊びにきなさい』

和世 『うん！』

トヨ 『おやすみなさい』

和世 『おやすみなさい』

和世が見送ると文字が入る

ナレ 『これが和世と祖父母の最後の別れとなった』

『昭和20年、玉音放送の予告が8月14日夜9時と15日朝7時に
ラジオで全国に伝えられた。』

町長、キヨシがラジオを聴いている

キヨシ 『今日の正午…』

町長 『うん。夕べと今朝で二回…ラジオで言ってた。こいじゃいかん』

キヨシ 『ですね。じゃあおいは部落のみんなに伝えに行きます』

町長 『キヨシ君。いつもすまんね』

キヨシ 『いえ。わけ男んしゃーが少ないからおいが気張らんと』

とみ子が入ってくる

とみ子 『こんにちは。茄子が取れたんでうちのかーちゃんが町長さんにもっていけつ』

町長 『あら。とみ子ちゃん。ありがとねえ。』

とみ子 『あ、ずんばいあっせえ…キヨシさんにも』

キヨシ 『ありがとだね。あ、とみ子ちゃん。頼まれてほしい』

とみ子 『え？なんですか？』

キヨシ 『今日の正午にお国から大事な発表があるつラジオで言ってたがよ』

町長 『とみ子ちゃんげえにラジオあったよね？』

とみ子 『です。じゃあ近所んしゃーに伝えます』

キヨシ 『とみちゃん。ありがとね』

とみ子 『いえ…』

キヨシ 『じゃあ部落の人たちに伝えにいつが』

町長 『うん。キヨシ君よろしくね。とみ子ちゃんも』

キヨシ 『はい』

とみ子 『いえ、有馬さんげえと山元さんげえには私が伝えます』

町長、キヨシ 慌ててハケると奥からウメが現れるラジオを持っている
ウメがスイッチを押すと

M 君が代

ナレ 『15日正午― 予告通り玉音放送が流れた。天皇陛下からの言葉は約5分
戦争に関する放送を含むと37分半にわたる放送であった。』

しかし、垂水市の電波は非常に弱く、聞きづらい放送だった。』

トヨ、和子、ハル、千代、サチコ、とみ子 ー るみ が板につくと

玉音放送のラストの部分にクロス

その様子をリヨ子と静香と和世が見ている

ウメ 『天皇陛下様のお言葉じゃ。ありがてえ…』

ハル 『よく聞こえなかった』

サチコ 『おかしちゃんな聞こえた？』

和子 『んー天皇陛下様はなんて言ったろうかい？』

千代 『ウメさん。なんて言ったか聞こえたの？』

ウメ 『え？わからなかった？』

るみ 『わからなかった』

全員が頷く

和子 『ウメちゃんなわかったの？』

ウメ 『うんにゃ』

リヨ子 『だーれも天皇陛下が何を言ってるかわからなかったそうよ』

静香 『え？そうなの？』

幸彦が慌てて入って来る

リヨ子 『そうよ。それで幸彦おっちゃんが来て教えてくれたんだって』

静香 『へえ。そうなんだ』

全員が落胆しながらハケ
残されたトヨは何かを思いついた様に慌てて飛び出していく

静香 『ばーちゃんどこに行ったの？』

リヨ子 『浜だって』

和世 『ばーちゃんは何かあったら海に行くよねー』

リヨ子 『実家から近いもんねえ』

静香 『めちゃくちゃ汚いけどね』

リヨ子 『あらあゝ昔はキレイだったんだよ』

和世 『そりゃ昔はね。今はそりゃあ汚くなるよねえ』

リヨ子 『あれ？なんでか知ってる風じゃないの？』

和世 『うん。ちよっとアレから色々調べたんだ』

静香 『ええ？仕事で疲れてるくせに調べたの？』

和世 『まあね』

リヨ子 『本職のあんたより勉強してんじゃん』

静香 『私は今オフシーズン中だから』

リヨ子 『あっそ。(和世に) へえ。元気出たんだね』

和世 『じーちゃんとばーちゃんに元気をもらったからね』

静香 『うーわ。ズル。私も元気もらいたいなあ』

リヨ子 『いや、あんたは元気でしょうよ』

静香 『ち：これだからデリカシーの無い人間は嫌いだ』

和憲が内線を持ちながら入って来る

和憲 『おい。ずっと鳴らしてるだろ？客がいんだぞ？』

静香 『呼び出しですよ』

リヨ子 『くそ：親子水入らずな時に』

静香 『パパ、カウントされてない』

和憲 『は？』

リヨ子 『あんたは関係ないわよ！行くから先行っててよ！』

和憲 『なんか腹立つな…』

和憲ハケ

リヨ子 『またなんかわかったら教えてね』

和世 『うん』

静香 『早く行かないとパパに激怒されるよ?』

リヨ子 『はーあ。やだやだ』

リヨ子ハケ

静香 『でもどうだったんだらうね』

和世 『何が?』

静香 『戦争が終わったって事を知って。皆どう思ったんだらうね』

和世 『様々だったみたい。悔し泣きをしていた人もいたらしいし』

静香 『安心した人もいたみたいだよ』

和世 『へえ。悔し泣きとか：絶対に安心するよね。戦争が終わったんだから』

静香 『戦争で家族を失った人もいただらうからね。外国を憎む人もいたんじゃない?』

和世 『そっかあ。なんかすさまじいね：うう』

静香 『また気持ち悪くなったの?』

和世 『え?あんたよく平気でいられるね。戦争の話は無理だ:』

静香 『平気でもないけどね』

和世 『ううう:』

静香が気持ち悪そうにハケて行く。『大丈夫?』と言いながら和世もハケ文字

ナレ『昭和22年9月鹿兒島。沢山の兵士が戦地から引き揚げてきた。』

しかし豊作と力蔵の引き揚げの知らせは一向になかった』

港で名前を書いた布や紙を掲げて人々がいる

ウメが誰かを見つけたような表情。嬉しそうに抱き合う

トヨととみ子、幸彦も大喜びをしながら家族は抱き合う

和子、ハル、サチコは肩を落としハケて行く

『そんな中。川端家の家長である正三がかえって来たのだが』

肺炎にかかり床に臥せる。そして時が流れた』

ウメ、幸彦、正三、トヨハケ 縁側に千代が入って来る

『時は流れ：昭和23年10月初旬』

千代が咳をしながら縁側に座る

『豊作が鹿児島に引き揚げてきたのであった』

ポロポロの服を着た豊作が下手から入って来る
千代思わず立ち上がり豊作を抱きしめる

千代 『おかえりなさい』

豊作 『すみません：帰ってきてしまいました』

そして千代が咳をすると豊作が心配し縁側へ促す

豊作 『ねーちゃん。どげん塩梅ね』

千代 『うん。大丈夫。豊作ちゃんがかえって来たから元気が出った』

豊作 『そか：おいも元気が出た』

千代 『ほうさくちゃん！つかれたろー？おやつとさあねえ』

豊作 『うんにゃ。そげんこつなか。おいは見張りをしただけだから』

千代 『それでも：大変だったでしょ？』

豊作 『満州のしゃーは皆いい人で料理もわっせえご馳走になった』

千代 『あら？そうなの？』

豊作 『だよ。ねーちゃんにも食べさせたかったあ〜』

千代 『優しい人達がいたんだね』

豊作 『だよ。ほいれねえ帰りの船でね。こげん太かいワシが取れてね』

千代 『へえ！日本海は広いもんねえ。どれくらい？』

豊作 『これくらいじゃったか？いや、これくらい？いや：こげんくらいか？』

豊作 だんだんありえない大きさのマイム

千代 『まこて！そげん太かいワシだったら腹がいっぱいになっで』

豊作 『よー。周りの人にもふるまつせえ。一人じゃ食えんかった』

千代 『あらあ：豊作ちゃんは冗談ばかり言うよ』

豊作 『冗談じゃないよ！』

二人が笑い合っていると 幸彦とるみが慌てて入って来る

幸彦 『ほうさつどん！』

豊作 『あら！幸ちゃん！太（ふと）かなったね！どら！どら！抱っこをさせっみよ』

幸彦を抱っこしようとする

幸彦 『ほうさっどん。そげん簡単に太くならん!』
豊作 『そうけ?』
幸彦 『おやっとさあ』
るみ 『ほうさっどん!おやっとさあ』
豊作 『あら…るみちゃん。元気やったかいね?ご飯ば食べてる?』
るみ 『うん。ほうさっどん…生きててよかった』

豊作の胸を借りてるみは泣く 豊作はるみの頭をなでる

幸彦 『るみちゃんな。おいげえで元気に頑張ってるよ』
豊作 『そうけえ…るみちゃん。きばったねえ』
るみ 『ほうさっどんの方がきばったいが』
幸彦 『おいも…おいも日本のために戦いたかった』
豊作 『何(なん)を言いよつと。幸ちゃんは立派に戦った』
幸彦 『戦っちよらんが!』
千代 『幸ちゃんはやー。みーんなを見事(みごつ)守ったんだよ』
豊作 『おおお!わっぜえ!』
幸彦 『おいは…おいは何(ない)もしちよらん!』
豊作 『ないごて!ねーちゃんと近所んしゃーを守ってくれてありがとう』
幸彦 『当然の事をしただけじゃ』
豊作 『守るのも立派な仕事だよ』
幸彦 『ほうさっどん…おいは…おいは…』

幸彦悔しがる

豊作 『何(ない)も言わんでよか』
るみ 『おじさんがね。かえってきたよ!』
豊作 『はら!そうね?えがったあ…』
幸彦 『でも病気にかかっせえ今は家でずっと寝てるよ』
豊作 『そうかあ…』
千代 『でもかえって来たのならえがったよ』
るみ 『だよg』
幸彦 『ほいれね!おいげえでほうさっどんの為に、ご馳走を用意するってかーちゃん

が言うたんで知らせにきよったがよ』

豊作 『あらあ。そこまでせんでも…』

幸彦 『お国の為ん働いた人やっで！それくらいせんとバチがあたっど。千代さんも是非！』

千代 『あらあ…すみません』

幸彦 『せいじゃ。かーちゃんに知らせてきます！』

幸彦がニコニコしながらハケ

豊作 『幸ちゃんは元気じゃ』

千代 『だよ。ああして皆を元気にしてくれたんだよ』

豊作 『ありがたいねえ』

和子とハル サチコが入ってくる

和子 『あらよ』

ハル 『ほうさっどん！』

豊作 『和子さん、ハルちゃん』

和子 『おやっどさあ〜ねえ』

ハル 『ほうさっどんじゃ！』

サチコ 『おかえりい〜！』

和子とハル、サチコが豊作に抱き着く

豊作 『帰ってきてしまいました』

和子 『よかよか！立派じゃ！ほうさっどんは立派じゃ！』

ハル 『お兄ちゃんは？』

サチコ 『うん！力蔵兄ちゃんと同じ軍だったんでしょ？』

豊作 『…和子さん。これ』

豊作 カバンから包を取り出し和子に渡す

和子 『こいは…』

豊作 『力蔵さんの脚絆じゃ』

和子 『そうね…ありがと〜…ありがと〜ねえ…』

ハル 『兄ちゃん…兄ちゃん…』

豊作 『すみませんでした』

和子 『力蔵はどうだった？最後まで頑張ったの？』

豊作 『力蔵さんは立派じゃった。最後までお国の事を心配してました。そして和子さんとハルちゃん：サッチャンによろしくつ』

千代 『あらよー』

和子 『そうだったの？良かったあゝ。力蔵が最後まで立派だったなら良かった』

ハル 『力蔵兄ちゃん：』

豊作 『ハルちゃん、さっちゃん。ごめんなさい』

サチコ 『大丈夫！力蔵兄ちゃんはお国の為に戦ったでしょ？』

豊作 『もちろん！』

サチコ 『良かったあゝ』

和子 『ほうさっどん。ありがとう』

豊作 『いえ：』

和子 『じゃあ、力蔵も帰ってきたし、家にもどろ』

ハルとサチコ 『うん』

和子とハルが千代と豊作に一礼してハケ

千代 『豊作ちゃん。お風呂に沸かすから入っておいで』

豊作 『ありがとう』

千代 『じゃあその間にご飯の準備をしないとね』

豊作 『そうだね。腹がへったあゝ』

和子とハル サチコ三人の泣き声が聞こえる

豊作が肩を落としてしている。千代は優しく豊作の肩をたたき部屋の中に案内する
海の音、トヨが海を見ている

しばらくすると幸彦とるみが元氣そうに入って来る

幸彦 『ねーちゃん！また浜に！』

トヨ 『どうしたの？』

るみ 『何をしているの？』

トヨ 『鹿兒島ん煙が消えた』

幸彦 『だよ。戦争は終わったんだよ』

るみ 『うん。』

幸彦 『あ！それより！ほうさっどんが帰ってきた』

トヨ 『な？もう家にいるの？』

幸彦 『うん。かーちゃんが帰ってきたら知らせろって言うてたよ』
トヨ 『よかったあ：ほうさつどんが生きてて』
るみ 『だよ。元気そうじゃたあ』
トヨ 『そうね。』
幸彦 『おいを太かなくなったつ抱っこをしようとした』
るみ 『冗談を言いよつせえ』
幸彦 『そいがほうさつどんじゃ』
トヨ 『そいで、力蔵さんは？』
幸彦 『力蔵さんはみんかった。でもほうさつどんがかえって来てるからいるかも？』
トヨ 『そっか：それなら良かった：』

トヨ 座り込む

幸彦 『とりあえず、かーちゃんが帰って来いって。料理を手伝えつ』
トヨ 『わかった』
るみ 『トヨちゃん！いこ！』
トヨ 『うん！』

川端家―。部屋奥にはウメ、正三、豊作 手前には千代と幸彦がいる
トヨも一緒に楽しそうにしている。にぎやかな様子、町にいた男衆が丁度帰る所
あとからるみと幸彦、トヨも入って来る

正三 『あら？町長さん？もう帰るの？』
町長 『ああ：わつぜえご馳走になりました』
キヨシ 『正三さんと幸ちゃんな釣りの名人やつで。こげんずんばい料理が出来る』
正三 『いやいや。たまたまじゃ』
町長 『あらく謙遜しよつせえ』
キヨシ 『あとウメさんの料理な美味（うめ）ねえ』
ウメ 『ありがとうございます』
町長 『自家製のチキ揚げは見事（みごと）』
とみ子 『かーちゃん私にも教えてよ！』
キヨシ 『とみちゃんのチキ揚げが食べてみたいねえ』
町長 『わー。とみちゃんに惚れよつたいが』
キヨシ 『そげんこつなか！』
正三 『まあまあ：もういっぺ位、白波のお湯割りを飲んで帰ったら？』
キヨシ 『いやいや。明日も早えもんで』

町長 『うちんげえかーちゃんに怒られる』
正三 『あら。残念ねえ』
とみ子 『また遊びに来てください』
キヨシ 『はい。また』
町長 『ご馳走になりました』
正三 『じゃあ、結婚の件はそういうこつで』
町長 『よろしく』
キヨシ 『じゃあ、おいたちはこれで』
ウメ 『また来てください』

男1と町内長は頭を下げてハケ

正三 『じゃあ、ほうさつどん。もういっぺ』
豊作 『ああ。頂きます』
千代 『こげんずんばい食べたのは久ぶいじゃ。ありがとうございました』
とみ子 『いーえ。千代さんは食べて元気をつけんと』
ウメ 『だよ』
幸彦 『ほうさつどん！戦争はどうやった？』
正三 『こら。幸彦！わー。父ちゃんにずんばいききよっせえ。まだ聞くのか』
ウメ 『だよ。戦争に行つてほうさつどんは疲れてるんだよ。あんまり聞かないの』
幸彦 『でも…』
豊作 『ああ…ちよつと勘弁してもらえんかな？』
幸彦 『すみません…』

幸彦が落ち込んでいると

トヨ 『和子さんげえも来たら良かったのにねえ』

少し気まずい間

ウメ 『あら？どうして？』
トヨ 『力蔵さんがかえってるんなら、一緒に食べても良かったのにね』
幸彦 『力蔵さんな。疲れちよつたいが。ほうさつどんより細（ホセ）ろ』
ウメ 『いや…そうなんだけどね』

また気まずい間

正三 『有馬さんげは来ん』
トヨ 『あらどして?』
ウメ 『とーちゃん:』

正三 頷いて

正三 『おトヨ。よー聞け。力蔵さんは戦争でけ死んだ』
トヨ 『え?』
正三 『ほうさっどんが:。お前が浜に行きよったときに話してくれた』
豊作 『ごめん。先に報告せんといかんかったのはトヨちゃんやね』
正三 『えたいが。ほうさっどん。』
トヨ 『そんな:』
幸彦 『そげな所におらんと。こっちに来んね。今日はほうさっどんが主役だよ』
とみ子 『そうそう!ねーちゃん。こっちでほうさっどんに酌をせんめ』
トヨ 『ほうさっどん。冗談だよね?』
豊作 『:』
トヨ 『ほうさっどんはいつも冗談を言うがよ』
豊作 『いや:これは』
正三 『おトヨ!もうこれ以上いうな!ほうさっどんの気持ちも考えんか!』
トヨ 『:』
正三 『ほいで、おトヨ。ほうさっどんとお前は結婚をせえ』
トヨ 『え?何(ない)でほうさっどんと?』
正三 『ないでつ:わー』

ウメが正三を止め

ウメ 『町長さんととーちゃんて決めたんよ。千代さんげえとウチが親戚同士になれば
よー千代さんの面倒も見れっし安心すつがよ?』
千代 『私のために:すみません』
トヨ 『わからん』
ウメ 『わからんつ。何(ない)がわからんの』
トヨ 『力蔵さんがかえってこん事も:ほうさっどんと結婚するのも:わからん』
ウメ 『まこて:トヨ、こげん聞き分けが悪か子やったかいね?』
豊作 『おいが:おいが力蔵さんこつ、よかにせやったら良かったいがね』
正三 『ほうさっどんえたいが』

トヨ 『ほうさっどん：なんでそんな冗談が言えるの？』
豊作 『ああ：ごめんなさい』
トヨ 『信じられん』
正三 『おトヨ。ほうさっどんに謝れ』
トヨ 『何（ない）で私が謝らないといけないの？』

トヨがにらむと正三が頬を打つ

正三 『おトヨ！わー何ごち親にさからいよっせえ偉そうに！』
ウメ 『とーちゃん！そこまでせんでいいよ！おトヨ謝れ！』
トヨ 『…』
正三 『何（ない）か言わんか！』

正三がもう一度殴りに行こうとすると
トヨ 走って逃げる

正三 『待たんか！』
豊作 『トヨちゃん！』
正三 『ほうさっどん！行かんでええ！』
豊作 『ちゃんと説明をせんと！』
千代 『です。トヨちゃんが可哀想！』
ウメ 『私たちで探します』
正三 『あまやかさんでええ！頭を冷やせばええたいが！』
ウメ 『幸彦！行け！』
幸彦 『なんかあったらおいや！』
ウメ 『いいから行かんか！』
幸彦 『もー。ねーちゃん！』
るみ 『私も行きます！』
とみ子 『るみちゃん！私も！』

幸彦が走って行ったあと、とみ子とるみもその後を追う

正三 『ほうさっどん。すまんかった』

正三が頭を下げる

豊作 『いえ…そげんこつありません。こっちこそすみません』
正三 『はあ…今日はもう寝くつで』

正三 ハケ

ウメ 『ほうさつどん、千代さん…ごめんなさい』

豊作 『謝らんでください』

千代 『トヨちゃん大丈夫かねえ…』

豊作、千代、ウメに挨拶をしてハケ。ウメもテーブルの片づけをしてハケ
リヨ子と静香、和世が入って来る

リヨ子 『って話は聞いた事があるかなあ』

静香 『うわあ…きつついなあ…いやあくでもばーちゃんの気持ちわかるなあ』

和世 『うん。ちよつとキツイよねえ…』

リヨ子 『おばーちゃんはその後どこに行ったと思う？』

静香 『え？浜でしょ？なんかあつたらそこに行くじゃん』

リヨ子 『なんでわかるの？』

静香 『だっておばーちゃんってすぐに浜に行くじゃん』

リヨ子 『あんたすごいよね…ニートのくせに』

静香 『いや大学生だから！4年だから、頭いいから』

リヨ子 『なんだ手紙読んだのかと思った』

和世 『え？手紙？』

リヨ子 『あ！言っちゃった！しゃーない！教えてあげるわ！』

リヨ子 手紙を出す

静香 『何それ？』

リヨ子 『おばーちゃんからの手紙』

和世 『え？うそ！』

静香 『ずるい！』

リヨ子 『ははは！この先を知りたいならママに逆らうんじゃないよ！』

静香 『ははー！教えてくだせー！』

静香 土下座

リヨ子 『オーほほほほほほ！』

和世 『何それ…てかそれって私への手紙じゃないの？』

リヨ子 『ギク…なぜそれを…』

和世 『私が話を聞きたがってたからね。はい返して』

静香 『えええ？何それえ〜』

和世 『ほら返してよ、てか人の手紙を勝手に読まないでよ』

リヨ子 『だって…私も混ぜてほしかったんだもん』

和世 『も〜』

リヨ子から手紙を奪い返す

リヨ子 『ねえ！かずちゃん。読んでくれない？』

和世 『うん。いいよ』

和世 が手紙を広げると 鹿児島の人間たちが力蔵を見送る

和子 『力蔵！きばってね！』

力蔵 『はい！』

ハル 『兄ちゃん…』

サチコ 『兄ちゃん…』

力蔵 『二人とも。かーちゃんを宜しくな』

ハルとサチコ 『うん』

力蔵 『じゃあ…行ってくる。』

町長 『ばんざーい！天皇陛下！バンザーイ！』

全員 『ばんざーい！』

町長 『有馬力蔵くん！ばんざーい！』

全員 『ばんざーい！』

町長 『ばんざーい！』

全員 『ばんざーい！』

トヨを残して全員ハケ

力蔵 『トヨちゃん…いって来る』

トヨ 『うん…』

力蔵が行こうとすると

トヨ 『ばんざーい！有馬力蔵君…ばんざーい！』
力蔵 『(敬礼)…行ってきます！』
トヨ 『力蔵さん！』

トヨが駆け寄り

トヨ 『無事で…無事でかえってきてえ…』
力蔵 『…』

力蔵は無言でトヨを抱きしめる

力蔵 『じゃ…行って来る』
トヨ 『…わかった』

力蔵がハケ

トヨ 『力蔵さぁーん』

トヨが崩れる 海の水

リヨ子、静香、和世 ハケ

しばらく泣き崩れていると立ち上がり。

川端家が変わって行く。ウメととみ子がるみ入って来る

ウメ 『あら…また浜に行ったの？』

トヨ 『うん。』

とみ子 『ほうさっどんは消防士になったんだって』

トヨ 『そう』

ウメ 『ほいれ。今日もほうさっどんがくっでね！』

トヨ 『そう』

ウメ 『はあ…こん調子じゃもんねえ』

るみ 『だよ』

豊作が入って来る

豊作 『こんにちは！』

ウメ 『あら。ほうさっどん。噂をすれば影じゃ、今日もうちで食べていく?』
豊作 『いや、ねーちゃんが心配なんで家に帰ります』
ウメ 『じゃあ握り飯（にぎんめし）をこさえてね。千代さんにもくわせつみよ』
豊作 『いつもありがとうございます』
ウメ 『えたいが。ほうさっどんは家族やっで』
豊作 『気が早え。あ、トヨちゃん! 今日おもしてこつ（面白い事）があっせえね』
トヨ 『へえ。良かったねえ』
豊作 『そいでね。トヨちゃんに聞いてもらおうかと思っせえね』
トヨ 『私はいい』
豊作 『え?』
トヨ 『私は冗談が嫌い』
豊作 『いや、この話を聞いたら元気が出くっで!』
トヨ 『出ない。最近戦争終わっせえ。みんな貧乏なのにどうして冗談が出来るの?』
豊作 『え? そうやったいね! 冗談言ってる場合じゃなかった!』
ウメ 『トヨ! ほうさっどんに謝らんか!』
トヨ 『ほうさっどん。千代さんに宜しく』
ウメ 『もーあげんこついいよっせえよ。ほうさっどんごめんなさいね』
豊作 『いや、冗談言う、おいが悪かった!』

幸彦がかえって来る

幸彦 『ただいまー! あ、ほうさっどん。おやっどさあ』
豊作 『あら、ゆきちゃんね! 太（ふと）かなったなねえ! どちら? どちら?』
幸彦 『さっきも会ったよ! すぐに大きくはならん!』
豊作 『あらまー。あんま変わらんね?』
幸彦 『当然やっで!』
ウメ 『ほうさっどんな、まこておもしてね』
幸彦 『おいと会えばずっとこいばしてくっど』
豊作 『ゆきちゃんが太かなったらおいは嬉しいよ』
幸彦 『もう…冗談はやめれ!』
ウメ 『まこてしたもんじゃ』

豊作と幸彦、ウメが笑っていると

トヨ 『ひとつこ。おもしろかね』

トヨが言い放って出て行く

幸彦 『ねーちゃんはもう：ほうさっどんの何が良くないのかね？』
るみ 『だよ。よか人やらよ』

豊作 『大丈夫です。じゃあ正三さんに挨拶をして帰ります』

とみ子 『ああ：そいがね。最近とーちゃんは調子の悪くて奥で寝てるよ』

豊作 『あいや。そないダメなの？』

ウメ 『です。肺をやられちよせえね。咳ばっか』

豊作 『ですか：じゃあ少しだけ』

ウメ 『うん。そけからあがっせえ。奥へ。幸彦案内して』

幸彦 『かーちゃんはお使いが荒い』

豊作 『ゆきちゃんなゼロ戦ごつ動きやっせえ』

ウメ 『だよ。動きが早いから幸彦にお願いするんだよ』

幸彦 『おげんかーちゃんなおいの上官じゃ』

豊作 『では、行ってまいります』

豊作 敬礼

ウメ 『ほうさっどん。幸彦、行ってらっしゃい』

ウメが敬礼し返す

幸彦 『かーちゃんまで何（ない）ばしちよっと』

五人が笑いながら奥へハケて行く

山元家 千代が縁側に入ってきて腰を掛ける

千代 『よっこいせ』

するとハルとサチコが入って来る

千代 『あら？こんばんは』

ハル 『こんばんは。かーちゃんに千代さんの様子を見てこいっていわれっせえね』

千代 『ああ：ありがとう。今日は調子がいいよ』

サチコ 『よかった』

千代 『：和子さんは大丈夫？』

ハル 『ああ…いつまでも暗い顔してん兄ちゃんは帰ってこん』
千代 『つよいね』
サチコ 『です。力蔵兄ちゃんの妹やっで』
千代 『たくましか』
サチコ 『うん。千代さん何（ない）かあったら言ってくださいね』
千代 『ありがとう』
ハル 『もうじき、かーちゃんがご飯をこさえさせえ。こっちに來るち言うてました』
千代 『あら…もうないれんかいれんありがとう』

豊作が入って來る

豊作 『あら、ハルちゃんとサッチャーん。こんばんは』
ハル 『こんばんは。』
千代 『丁度いい時に帰ってきた。和子さんがご飯をこさえさせえきてくるんだって』
豊作 『まこて？ありがとう。助かったあ』
サチコ 『何が助かったの？』
豊作 『川端さんげえで握り飯（にぎんめし）をもらっさせえね
でもこいじゃ足りないっておもっさせえね』
ハル 『ほうさっどんは食いしん坊じゃ』
豊作 『腹いっぱいって言うのは幸せな事だよ』
千代 『だよ。豊作ちゃん是一家の大黒柱になるからね。沢山食べて、きばってもらわ
んと』
豊作 『な？戦争より大変かもしれらん』
サチコ 『戦争より大変な事ってあるの？』

4人が笑っていると和子が入って賣る

和子 『あらまあ。にぎやかねえ』
ハル 『ほうさっどんはわっぜえ面白い』
サチコ 『今みんな笑いよったんよ』
和子 『ほうさっどんが帰って來てから笑顔がたえん』
豊作 『おいは何（ない）も言うちよらん』
和子 『千代さん。どげん塩梅ね？』
千代 『うん。今日はそげん咳は出んし、調子がいいよ』
和子 『無理をしないようにね。ウチんげえを頼るんだよ？』
千代 『ありがとう。』

和子 『ほうさつどんもウチんげえを頼ったらいからね!』

豊作 『ありがとう』

サチコ 『力蔵兄ちゃんがいなくなったぶん、ウチんげえは余裕あつて、家族と思つていくらでもたよつてね!』

千代 『助かる』

サチコ 『それにほうさつどんはトヨちゃんをお嫁にもらうんでしょ?』

豊作 『あ…まあ…』

ハル 『トヨちゃんが隣に来たらにぎやかになる!』

和子 『だよ。トヨちゃんが来たらいげえもまた忙しくなるねえ』

千代 『トヨちゃんが来たらいげえもにぎやかになつせえ。今までのお返しをします』

豊作 『です。今までのお返しをしますので楽しみにしててください!』

和子 『そげな気を使わんでえて…ねえほうさつどん』

豊作 『なんです』

和子 『力蔵の最後はどうだったの?』

豊作 『和子さん…』

ハル 『うん。私もお兄ちゃんの事聞きたい』

サチコ 『だよ。ほうさつどん。もうないも気を使わんでえれ!』

豊作 三人を見

豊作 『わかりました。ただ…悲しまんでください。力蔵さんは立派じゃった』

サチコ 『だから大丈夫。もう気持ちの整理がついちよつで!』

ハル 『ほうさつどんは見たんてでしょ?』

豊作 『うん。』

和子 『気をつかわんでえれ。ほうさつどんが嫌なら語らんでえろ』

豊作 静かにうなずき

豊作 『ほいじゃ…。おいと力蔵さんは満州で関東軍に入ったがよ。それでいつも満州のしゃーが反抗しないように見張りをしました。』

あれはもう…ソ連が南下してきて日本がもう負けじゃつてほとんどわかつてた時、基地にソ連がせめてきよつた。次々に鉄砲でうたれつせえ。軍の人達が次々と倒れていった』

ハル 『あらよ…』

豊作 『そんな時、おいは力蔵さんと鹿児島の話をして、どげんしたとかい?つて外をみたら、ずんばい人がたおれつせえね。』

力蔵さんがおいも行くて言いだして、飛び出して行ったんやけどね。おいは怖くて外に出れんかった。力蔵さんがソ連の兵隊に撃たれっせえ倒れたがよ。おいは「力蔵さん！」って抱きかかえたら、まだ息があっせえ。「かーちゃん」とハル：サチコよろしくち：トヨちゃんにはゴメンち言うてくれ」っ』

豊作が言葉を失っていると和子が微笑み

和子 『立派やったいね：おげん力蔵な立派じゃ』

豊作 『すみません』

和子 『ほうさつどん。ありがとう。ほうさつどんが居なかつたら力蔵がどんな風にけ死んだのかわからんままやった。本当にありがとう』

和子が頭を深々と下げる

豊作 『いやいや：おいは恥さらしやつで』

和子 『そげんこつなか。ほうさつどんは立派じゃ』

豊作 『：ありがとうございます』

ハル 『あないに優しかった力蔵兄ちゃんが鉄砲をもって走って行ったなんてね…』

サチコ 『信じられん。そげんこつたくましか人やったかいね』

和子 『戦争って言うのはそういう所かもしれないね』

豊作 『ああ：悲惨じゃった。でも力蔵さんは立派じゃった』

和子 『わかった！ありがとう！』

ハルとサチコ 『ありがとう』

三人がまた頭を下げる

豊作 『いやいや…』

千代 『豊作ちゃん。お風呂が沸いてるよ？』

豊作 『そしたら、ちよっと風呂に入ってきます』

千代 『だよ。入ってきなさい』

豊作 『じゃあ、和子さん、ご飯楽しみにしてます』

和子 『大したもんじゃないよ』

豊作 一礼をして風呂場に向かう

和子 『ほうさつどんが帰ってきて良かったねえ』

千代 『そうですね。助かります』
和子 『でも良かった』
千代 『何がです？』
和子 『力蔵がおらんから、トヨちゃんはこっちに来ないって思ってたからねえ』
千代 『ああ…』
和子 『トヨちゃんの相手がほうさつどんで良かった』
ハル 『だよ。ほうさつどんなら兄ちゃんも納得する』
サチコ 『ハルちゃんは幸彦さんやね』
ハル 『トヨちゃんがこっちに来てあつちに私がいくの？交換じゃね』
和子 『みんな家族みたいなんだからえろ』
千代 『トヨちゃん：元気を出してくれるといいけどねえ』

千代がこぼしたので和子とハルが不思議がる

和子 『トヨちゃん。何（ない）かあったの？』
千代 『：多分。力蔵さんの事が忘れられんみたい』
サチコ 『な？トヨちゃんが言ったの？』
千代 『うんにゃ。言っていない。ただ：元気がなっせえね』
和子 『力蔵の事なんか忘れて、ほうさつどんと結婚するのがいいよ』
ハル 『でも：トヨちゃんの気持ちはわかる』
和子 『そげなこつ言ってもねえ。ほうさつどんも良か人やらよ』
千代 『多分。豊作ちゃんの事もあまり好きじゃないみたい』
サチコ 『あらよー。どうして？』
千代 『豊作ちゃんな、冗談ばかり言うからねえ』
ハル 『な？それが良かどこやっで』
千代 『ねえ…どうしたらいいのかなって…』

千代が落ち込むとハルが話だす

ハル 『トヨちゃんの気持ちもわかる…でもほうさつどんの気持ちもわかってほしいな…』
サチコ 『だよ』
千代 『わかってると思うんだけどねえ…』

すると風呂場から豊作の声が聞こえる

豊作 「ねーちゃん！いけんかちべたい！」
千代 「あんら。もつとたぎらせればよかったねえ」
和子 「ここでご飯の用意をしておくから、行ってあげなさい」
千代 「すみません」

千代が立ち上がり 風呂場へハケ

和子 「さて！用意をしますかね！」
ハル 「うん！」

二人が食事の準備をしようとするとトヨが入って来る

トヨ 「こんばんは」
ハル 「あら！トヨちゃん！」
和子 「こんばんは」
サチコ 「こんばんは」
トヨ 「ほうさつどんが忘れ物をしたからもってきました」
和子 「あら、そうね」
ハル 「今、ほうさつどんが風呂に入ったんだけどちべたいっせえ。ね？」
サチコ 「だよ。千代さんがたぎらせにいったよ」
トヨ 「じゃ、これほうさつどんに渡しておいてもらえますか？」
ハル 「わかった」

トヨ、ハルに包を渡す

トヨ 「じゃあ私はこの辺で…」
和子 「トヨちゃん、一緒に食べる？」
トヨ 「いえ、私は大丈夫です」
ハル 「ないで？ずんばいあっせえ、トヨちゃんの分もあるよ」
トヨ 「おいげえにもあっせえ大丈夫ですよ」
和子 「そっか…じゃあウメちゃんに宜しく」
トヨ 「はい。それじゃあ」

トヨが頭を下げて帰ろうとすると

サチコ 「トヨちゃん」

トヨ 「はい」
サチコ 「ほうさつどんと結婚をするんだよね。おめでとう」
トヨ 「(無言で微笑む)」
和子 「力蔵の分まで幸せになってね」
ハル 「だよ！力蔵兄ちゃんなトヨちゃんの幸せを祈っているよ！」
トヨ 「：」
和子 「トヨちゃん：ごめんね」
トヨ 「あやまらないでください」
和子 「トヨちゃんは力蔵を忘れて幸せになっていいんだよ」
トヨ 「：ありがとうございます」

トヨ 頭を下げてかえって行く 和子たちはそれを見送るだけしか出来ない
時間が流れ、川端家―ウメが縁側に座る。ハル サチコ ハケ
和子、とみ子とウメが神妙な面持ちで座っている

ウメ 「そやったいねえ：」
和子 「ないか：力蔵のせいでごめんね」
ウメ 「いやいや。おいげえトヨな：ほんのこつ：」
和子 「トヨちゃんな：ぐらしか」
ウメ 「ないもぐらしかね。いけんしたらよかたいね」
和子 「だよ：で、トヨちゃんは？」
とみ子 「るみちゃんの準備を手伝ってるよ」
和子 「そうね：るみちゃんもいよいよだねえ」
ウメ 「うん。本当にえがった」

部屋の奥から幸彦とるみが入って来る

ウメ 「るみちゃん。準備はできた？」
るみ 「はい」
和子 「鹿児島に親戚がいてよかったいねえ」
るみ 「はい。お世話になりました。おじさんが大変な時にすみません：」
ウメ 「えれえれ。時々垂水に遊びに来なさい。ここはあんたのもう一つの家だよ」
るみ 「ありがとうございます：」
和子 「るみちゃん、元気だね」
るみ 「はい！」
和子 「ほいれ：正三さんの様子は？」

幸彦 『もうダメかもね：咳がとまらんし、ご飯も食わん』
ウメ 『とーちゃんがけ死ぬ前にトヨの花嫁姿を見せんと』
とみ子 『ねーちゃんは頑固過ぎやっで』
和子 『結婚式は間に合うの？』
ウメ 『そうだね。なんとか：』
和子 『そうねえ：それなら正三さんもえがったねえ：ほいじゃおいはこの辺で』
ウメ 『わざわざありがとねえ。幸彦！和子さんを見送らんか！』
幸彦 『いや、そいじゃおいはるみちゃんを見送れんが！』
和子 『いやいや。ウメちゃん！えれえれ！幸彦ちゃんもえろ！
ほいじゃ！るみちゃんまたね！』
『また！』
るみ

ウメと和子、幸彦がわいわい言いながらハケていく トヨが入ってくる

トヨ 『あら？みんなは？』
るみ 『和子さんを見送りにいったがよ』
とみ子 『かーちゃんも幸彦兄ちゃんも騒がしか人やっで』
トヨ 『るみちゃん。元気でね』
るみ 『うん』
とみ子 『るみちゃんがなくなるのさみしい』
るみ 『私も：さみしい』

二人が泣き始める

トヨ 『同じ鹿児島やっでさみしかね！』
とみ子 『だった。いつでも遊びにおいでね！』
るみ 『うん。また来るねえ！』
幸彦 『ないをしょっと！るみちゃんも準備ができたよ！』
とみ子 『はーい！わかった！幸彦にーちゃんな騒がし！』

とみ子が出ていく

トヨ 『じゃあ。私たちもいつが』
るみ 『うん：ねえトヨちゃん』
トヨ 『うん？どうしたの？』
るみ 『トヨちゃんな。ほうさっどんが嫌い？』

トヨ 『…苦手かも』
るみ 『ほうさつどんの話聞いてほしい』
トヨ 『…』
るみ 『きつと…ないか知ってるのかも？』
トヨ 『冗談しか言わんよ』
るみ 『垂水の空襲は怖かったでしょ？あん何十倍の景色をほうさつどんは見たんよ』
トヨ 『…ほんのこつ見たのかね？』
るみ 『ほうさつどんはないかあると思う。私はそう思う。よか人やっで』
トヨ 『るみちゃん』

ハルとサチコが入ってくる

ハル 『るみちゃん…』
サチコ 『今日たつの？さみしい』
るみ 『はるちゃん…さっちゃん…私もさみしい』

三人が泣き始めると 幸彦が入ってくる

幸彦 『ほら！ないをしちよつと？』
ハル 『幸彦さん。るみちゃんが…るみちゃんが…』
サチコ 『さみしい！さみしいよお』
幸彦 『わかったわかった！ほら！いっが！ねーちゃんも手伝え！』
トヨ 『うん。ほら！るみちゃんは鹿児島やつでいつでも会えるよ！』

幸彦とトヨが三人を慰めながらハケ

ナレ』2012年6月―豊作は癌で亡くなり、その後を追うようにトヨが亡くなった。

葬儀は鹿児島で行われ、和世は仕事で顔を出せなかった…』

文字が入っている間、ウメ、幸彦、和子ハケて行く、リヨ子と静香が入ってくる

静香 『和世ちゃん、結局、社畜になっちゃったね』
リヨ子 『そうねえ…元気貰ったって言ったのにねえ…』
静香 『それで今日も残業』
リヨ子 『うん。そうねえ。そろそろ帰ってくると思うんだけどね』
静香 『うわあ…もうすぐ明日じゃん』
リヨ子 『そうねえ…』
和世 『ただいまあ…』

リヨ子がダラダラと帰って来る

リヨ子 「噂をすれば影ありね」

和世 「はあ…」

リヨ子 「おかえり。おなかすいてないの？」

和世 「全然。もう寝る」

静香 「え？お風呂位入りなよ！」

和世 「いい。明日起きてから入る」

和世の後ろ姿を見て

静香 「もう辞めたら？」

和世 「うん。三年までもう少しだから頑張る」

静香 「もったいなくない？」

和世 「え？何が？」

静香 「いや、なんかさ、三年ってそんなこだわりどこから来るの？」

和世 「三年働いたら変わるって聞くし、それに退職金も三年でもらえるし」

静香 「退職金っていくらもらえるの？って言うかさ、そんなに大事？」

和世 「は？にしずちゃんにはわからないよ」

静香 「てか、アタシめっちゃ腹立ってるんだけど？おじーちゃんとおばーちゃんの葬

式に行けないくらい忙しいなら辞めたら？」

和世 「私だって…私だって行きたかったよ！」

和世より暗くなる

静香 「いやいや…逆切れじゃん」

リヨ子 「静香…静香にして」

静香 「え？ええ？」

リヨ子 和世を後ろから抱きしめ

リヨ子 「まだ手紙の続きあると思うのよね」

和世 「え？」

リヨ子 「あの手紙、結局二人が結婚したとこで終わってたでしょ？」

和世 「うん」

リヨ子 「二人がどうして仲がいいのかその理由書いてないでしょ？」
和世 「うん」
リヨ子 「二人の仏壇の中にあるわよ」
和世 「どうしてそれわかるの？」
リヨ子 「あんたは葬式に出てないでしょ？」
和世 「見たの？」
リヨ子 「あんたは中を見たら怒るでしょ？。…鹿見島に行って、見てきなさい。」

和世が驚いていると

リヨ子 「話の続きが聞きたいなら鹿見島に来てばーちゃんにいわれたんでしょ？」
和世 「うん。でも…」
リヨ子 「あんた、そんなに退職金にこだわるの？」
和世 「いや…そうでもないけど…」
リヨ子 「言えるわよ。あんたには口がついてるんでしょ？」
和世 「…うん」
リヨ子 「よし！決定！和世！きばらんか！」
和世 「うん！」

和世が笑顔で返事をする

静香 「え？私も行きたい！」
リヨ子 「いいわよ」
静香 「よっしゃー！やったー！イエイエイエ！」
リヨ子 「自腹ね」
静香 「え？ちょ！え？」

リヨ子と静香がハケ 和世が残っていると会社になり
岡谷が入って来る

岡谷 「なんだよ。話って忙しいんだよ」
和世 「えと…私、仕事辞めます」
岡谷 「うわあく勝手だねえ。引継ぎとかどうすんの？」
和世 「えと、斎藤さんと同期にお願いしていますから大丈夫です！」

斎藤と越後と阪本が駆け込んできて

齋藤 『ちょっと！竹原！これなんだよ！』
和世 『引継ぎノートです。まとめておいたので宜しくお願ひします！』
越後 『え？こんなの渡されても困るんだけど？』
阪本 『逃げるつもり？受理出来る訳ないでしょ？』
和世 『本社は納得してましたよ。それで受理してくれました。』
岡谷 『え？』
和世 『岡谷さんこれから大変ですね』
岡谷 『ちょっと！待てよ！どういう事だよ！』
和世 『どんな理由か全て本社に伝えました。それじゃあ。えーと
おやっとなさあ』

和世 一礼してハケ

岡谷 『ちよつと！竹原！』

岡谷と齋藤たちが追いかける 波の音

トヨが入って来るしばらく海を見ているとその後から豊作が入って来る

豊作 『るみちゃんな行ってしもたね』
トヨ 『あ、ほうさつどん…そだね』
豊作 『…トヨちゃんは浜が好きねえ』
トヨ 『ええ』
豊作 『海はキレイだもんねえ。』
トヨ 『そう？』
豊作 『だよ！ワカメやら藻がうきよっせえね！わっぜえにぎやかじゃ』
トヨ 『ほうさつどん。そういう海は汚いっていうんだよ』
豊作 『だった！』

豊作がとぼけていると

トヨ 『ねえほうさつどん…ほうさつどんはどうして冗談ばっかい言うの…』
豊作 『どうしてやろね？性格じゃ』
トヨ 『私は笑えん』
豊作 『それはぐらしかねえ』
トヨ 『ほうさつどん…本当に戦争に行ったの？戦争に行つたくせん。』

『どうしてそげな風にふざけてるの?』

豊作 『どうしてやるねえ…戦争に行つてないも出来んかったから呑気なのかもね』

トヨ 『ないも出来んかったの?』

豊作 『トヨちゃん。おいは…ないも出来んかった』

トヨ 『ほうさっどん…力蔵さんはほんのこつ戦つたの?ないか本当に思えん』

豊作 『…』

トヨ 『ほうさっどん…本当のこつ教えて!お願いだから』

豊作、トヨの真剣な顔を見つめ、決心した様子

豊作 『力蔵さんな…船の上でチフツにかかっせえ…け死んだ』

トヨ 『チフツ…?』

豊作 『そう…チフツ』

M 大型船の汽笛

医者 『これはチフツですね…』

力蔵たちが苦しそうに入つて来る。医者がその横に立ち、豊作に伝える

豊作 『それは病気ですか?』

医者 『そうだね。この引き上げ船でまん延している病気です』

豊作 『そうですか…』

医者 『最後までしっかり看取つてあげてください』

豊作 『そ…そんな…看取るつて…』

医者が一礼して違う場所へ行く。力のない声で力蔵が豊作を呼んでいる

力蔵 『ほうさっどん…ほうさっどん…』

豊作 『ほうさっどん…』

豊作は言葉に詰まらせてしまい。黙り込む。波の音トヨが不思議がつて

トヨ 『ほうさっどん?』

豊作 『おわり』

トヨ 『嘘…教えて』

豊作 『いや。これ以上は…』

トヨ 『教えてよ!ほうさっどん!』

豊作 『トヨちゃん：おいからはこれ以上語れん』
トヨ 『どうして？聞きたい。力蔵さんがどうやって死んだか：』
豊作 『：』
トヨ 『：まだ終わらん。私の中で戦争はまだ終わってない！』
トヨ 『：』
トヨ 『ねえ：ほうさつどん！終わらんの！』

豊作 黙ってトヨを見ていたがやがて語り始める

豊作 『力ない声でね。力蔵さんがおいを呼んだんよ』
力蔵 『ほうさつどん：ほうさつどん：』

場面が船の上になる

豊作 『力蔵さん！どうした？』
力蔵 『ほうさつどん：おいはもうダメかもね？』
豊作 『そげんこつなか！そげん言わんの！』
力蔵 『いや：自分でもようわかっちゃったいが』
豊作 『ないを：力蔵さん！一緒に日本に帰っど！』
力蔵 『鹿児島のちき揚げが食べたいねえ：』
豊作 『だよ！食べれるよ！』
力蔵 『：ありがとう。鹿児島はまだ先よね』
豊作 『力蔵さん！もうちよつと！もうちよつとで鹿児島だよ！』

力なくうなづく力蔵に対し、豊作は『俺も行くから』を歌って聴かせると
その後に力蔵が続く

豊作 『俺もゆくから君もゆけ』
力蔵 『北満州の太平野』
二人 『広漠千里果てしなき 自由の天地 我を待つ』
豊作 『力蔵さん！その調子じゃ！』

力蔵は微笑むと急に苦しみ始める

豊作 『あ！見えた！桜島じゃ！』
力蔵 『：ほうさつどん』

豊作 『ほら！元気を出さんと（へ）がふっで！傘をささんと！』

力蔵 『…傘なんかないよ』

豊作 『じゃあ降らんとこに移動をせんと！』

力蔵 『…ほうさっどん』

豊作 『どうした？』

力蔵 『…かーちゃん、ハルトサチコ…それからトヨちゃん…』

豊作 『かごんまのしゃーに…すみませんっ…』

力蔵 『何（ない）を言うてるの。自分の口でいえ！』

豊作 『…おいは…何（ない）も…日本の為にも…活躍せんでね…家にも帰れず…』

力蔵 『趙さんのお母さんを殺して…申し訳ない…申し訳ない…』

豊作 『ないを…立派ん戦ったがよ！おいは白がゆをもらってくっせえね！』

豊作 『ちよっと待ってて！』

力蔵 『もう…よか。ほうさっどん…こけ…ここにて』

豊作 『おいの頭の後ろには目がついちよっで！力蔵さんが力を無くさない様に見張りをしてるよ！見張りは満州で得意じゃった！いいね？』

力蔵 力なくうなずく

豊作が駆け足で離れ しばらくして戻って来る

豊作 『力蔵さん！白がゆじゃ！ほら食べんね！』

豊作が起こすと力蔵は腕を持つがしっかり持てない

豊作 『ほらしっかり持って！口に含んで！』

豊作が手伝って口に含ませる

力蔵 『…うめ』

豊作 『美味（うめ）ろが？鹿児島にはもっと美味（うめ）もんがあっせえ！きばれ！』

力蔵 『…（頷く）』

豊作 『竿があったら魚釣りが出来たんやけどねえ。船に乗る前に竿をもって乗ればえがった！』

豊作の話にゆっくりと頷きながら聞いていたがやがて息を引き取る

豊作 『おいが釣りをすればね！ふとかイワシをつっせえね！みんなにくばっせえ腹

いっぱいすすがよ！一人じゃ配れんから力蔵さんにも手伝ってもらわ
や！な！力蔵さん！』

豊作がゆすつても返事をしない

豊作

『力蔵さん？…あら…力蔵さん？（静かに歌う）生きて帰らぬ命ぞと 誓いてか
たき この胸に 高鳴り踊る大和魂（やまとたま） 熱血今ぞ溢れける 熱血
今ぞ溢れける』

M 俺も行くから 豊作が静かに力蔵を横にすると 船医が入って来る

船医が死亡を確認すると豊作は静かにうなずき脚絆を取る

船の大きな音が鳴り力蔵は船から蹴落とされる 海へ落ちる音

豊作は落ちていく力蔵を見送り 手を合わせる

それを見てトヨは泣き崩れる 暗転

和世が板付き リヨ子と静香に電話をかけている

和世

『そうそう！あったあった。うん。読んだよ』

リヨ子

『あら。良かったね』

和世

『うん。幸彦おっちゃんとおみ子おばさんがしばらく探してくれたけど、
私が見つけた』

静香

『ねえねえ！なんて書いてあったの？』

和世

『細かい事はまた東京に帰って！』

静香

『えええ！ずるーい！行きたかった！』

リヨ子

『お金をためていきなさい！』

静香

『うえっへーい』

和世

『あ、お母さんの事も書いてあったよ』

リヨ子

『え？私？』

和世

『うん！本当はリヨウ子にする予定だったけど、じーちゃんがうれしすぎて興奮
しちゃって役所で（リヨ子）って書きちゃったんだって』

リヨ子

『えええ？何それ？』

静香

『じーちゃん可愛いね！』

和世

『でも、ばーちゃんがリヨ子でいいの？って聞いたら、お母さん笑ったらしいよ』

リヨ子

『あらそう…なるほどねえ。で、今どこにいるの？』

和世

『今から浜に行こうと思って』

リヨ子

『わかったわ。気を付けてかえってくるのよ』

静香

『お土産宜しくね！』

和世 『どうかな？気が向いたら買っていく』
静香 『ええ！チキアゲ食べたい！』
和世 『わかった。じゃーねー』
リヨ子 『気を付けてね！じゃーね』

電話を切るとリヨ子と静香は部屋の奥に入っていく
和世も浜に向かって歩きだす
遠くからウメの声が聞こえる。トヨが板につく

ウメ 『トヨ！』

トヨ 『はい』

ウメ 『ほうさっどんげえに帰るんでしょ？』

トヨ 『うん。でも浜に寄ってから行こうかなって』

ウメ 『ほうさっどんを待ってから行きなさい』

トヨ 『うん。大丈夫。一人で行くから』

ウメ 『まだそげんこつ言っせえ…とーちゃんが居たら怒ってもらうんだけどね』

トヨ 『じゃあ行ってくるね』

ウメ 『ほうさっどんを待ちなさい』

トヨ 『だって、したくして遅いから先にいっが』

遠くから『トヨちゃん』と豊作の呼ぶ声がある

ウメ 『もう！ほうさっどん！はよせんね！』

ウメが豊作を呼びに行く

トヨが溜息をついて行こうとすると

ウメ 『ほうさっどん！何してるの？あぶない！』

豊作 『えたいが！おいは後ろに目がついちよっで！』

トヨが振り返ると後ろ向きに豊作が入って来る

トヨ 『な？ほうさっどん！何してるの？』

豊作 『おいの頭の後ろにはね、目が付いてるんだよ？』

トヨ 『な？危ない！そげん後ろ向きに歩いたら危ないよ！』

豊作 『いや、大丈夫！後ろに目が…』

豊作コケる

トヨ 『豊作さん!』

トヨが駆け寄る

豊作が背中を痛がっている

トヨ 『まこて!ふふふ…』

トヨがそれを見て大笑いする

海の音

二人は歩きだし浜にやって来る

和世も丁度、浜にいたようだ

やがて二人は手をつなぐ

和世はそれに気が付き満足した表情。

ナレ 『三人は海を向こうを眺める…眺める先は煙の上がない鹿兒島半島!』

ナレーションの後、ゆっくりと暗転

おやつとさあ

完